

茨城県教育財団文化財調査報告第297集

二重堀遺跡

主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス
整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 20 年 3 月

茨城県竜ヶ崎土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第297集

ふ た え ぼ り
二 重 堀 遺 跡

主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス
整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 20 年 3 月

茨城県竜ヶ崎土木事務所
財団法人 茨城県教育財団



二重堀遺跡遠景



二重堀遺跡完掘全景

序

茨城県は、長期的な展望のもとに県土の基盤整備を行っております。道路網につきましても、県土60分構想の具体化や円滑な都市交通の確保を図るなど、ゆとりある社会の実現を目指して快適な道路の整備を進めているところです。

主要地方道竜ヶ崎阿見線は、竜ヶ崎市から阿見町にかけての幹線道路であり、地域社会を支える動脈として極めて重要な路線です。この主要地方道竜ヶ崎阿見線に、首都圏中央連絡自動車道阿見東インターチェンジへのアクセスや、周辺地域の交通渋滞解消等を目的としてバイパスが計画されましたが、事業予定地内には、埋蔵文化財包蔵地である二重堀遺跡が所在しています。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県竜ヶ崎土木事務所から埋蔵文化財の発掘調査について委託を受け、平成18年4月から同年6月まで二重堀遺跡の発掘調査を実施しました。

本書は、二重堀遺跡の調査成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深める上でも大いに活用されることによりまして、教育・文化の向上の一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県竜ヶ崎土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、阿見町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成20年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 人見實徳

例 言

- 1 本書は、茨城県竜ヶ崎土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成18年度に発掘調査を実施した、茨城県稲敷郡阿見町飯倉字二重堀1,195番地の2ほかに所在する二重堀遺跡ふたえぼりいせきの発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。
調査 平成18年4月1日～平成18年5月31日
整理 平成19年7月1日～平成19年9月30日
- 3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、以下の者が担当した。
首席調査員兼班長 川 又 清 明
主任調査員 青 木 仁 昌
主任調査員 大 関 武
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長村上和彦のもと、主任調査員大関武が執筆・編集を担当した。
- 5 土塁及び堀跡の調査前現況の測量については、有限会社三井考測に委託した。

凡 例

1 地区設定は、日本平面直角座標第 IX 系座標に準拠し、X 軸 = -520m, Y 軸 = +36,720m の交点を基準点 (A1a1) とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C..., 西から東へ 1, 2, 3...とし、「A 1区」, 「B 2区」のように呼称した。さらに、小調査区は、北から南へ a, b, c...j, 西から東へ 1, 2, 3...0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1a1区」, 「B 2b2区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は、次のとおりである。

遺構 SK - 土坑 TP - 陥し穴 SD - 溝跡 SF - 道路跡

遺物 TP - 拓本記録土器 Q - 石器 M - 金属製品




土層 K - 攪乱

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は500分の1、遺構実測図は方形竪穴遺構・陥し穴・火葬土坑・土坑は60分の1、土塁・堀跡・溝跡・道路跡・平場遺構は300分の1に縮尺して掲載することを基本とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は原則として3分の1で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構及び遺物の実測図中の表示は、次のとおりである。

 = 焼土・施釉  = 表土・繊維土器断面  = 旧表土・硬化面・炭化物

● = 土器

4 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

5 遺構一覧表・遺物観察表の表記については、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は、m・cm, kg・gである。なお、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。

(2) 備考の欄は、残存率や写真図版番号、その他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号については、土器、拓本のみ記載の土器片、石器、金属製品ごとに通し番号とし、本文・挿図・写真図版に記した番号も同一である。

6 「主軸」については、長軸・長径を主軸とみなした。主軸方向は、軸線が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で示した(例 N - 10° - E)。

抄 録

ふりがな	ふたえぼりいせき							
書名	二重堀遺跡							
副書名	主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第297集							
著者名	大関 武							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2008(平成20)年3月24日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
ふたえぼりいせき 二重堀遺跡	いばらきけんいなしきぐんあみまちい 茨城県稲敷郡阿見町飯 倉字二重堀1,195番地 の2ほか	08443 - 101	35度 59分 34秒	140度 14分 29秒	24 ~ 26 m	20060401 ~ 20060531	8,308㎡	主要地方道 竜ヶ崎阿見 線バイパス 整備に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
二重堀遺跡	その他	縄文	陥し穴 1基		縄文土器, 石器		二重の土塁 と堀は、二つ の谷津頭を結 ぶ「堀切」状 に造られている。 これらの 施設は、台地 上の通行を遮 断するための ものと思われる。	
	城館跡	中世	土塁 3条 堀跡 2条 溝跡 7条 平場遺構 2か所 方形竪穴遺構 2基 火葬土坑 3基 土坑 9基		土師質土器, 陶器, 石器, 鉄製品			
	その他	時期不明	道路跡 7条 土坑 13基		陶器, 磁器			
要約	二重堀遺跡は縄文時代と中世の複合遺跡である。主体となるのは中世後半(16世紀)の城郭関連遺跡で、平行する当該期の土塁3条と堀跡2条が確認された。また、この二重の土塁と堀跡の南側からは、土橋を伴うL字形の区画溝が確認された。							

目 次

序	
例 言	
凡 例	
抄 録	
目 次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	11
第1節 遺跡の概要	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	12
1 縄文時代の遺構と遺物	12
(1) 陥し穴	12
(2) 遺構外出土遺物	14
2 中世の遺構と遺物	14
(1) 土塁	14
(2) 堀跡	16
(3) 溝跡	24
(4) 平場遺構	30
(5) 方形堅穴遺構	31
(6) 火葬土坑	32
(7) 土坑	34
(8) 遺構外出土遺物	37
3 その他の遺構と遺物	38
(1) 道路跡	38
(2) 土坑	41
(3) 遺構外出土遺物	43
第4節 まとめ	44
写真図版	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県竜ヶ崎土木事務所は、地域社会の発展と交通の円滑化を図るために、主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパスの建設を進めている。

平成17年4月8日、茨城県竜ヶ崎土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス建設事業における埋蔵文化財の所在の有無及び取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は平成17年5月26日に現地踏査、平成17年10月18～20日、及び11月30日に試掘調査を実施し、二重堀遺跡が所在することを確認した。平成17年12月13日、茨城県教育委員会教育長は茨城県竜ヶ崎土木事務所長あてに、事業地内に二重堀遺跡が所在する旨回答した。

平成18年1月27日、茨城県竜ヶ崎土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、平成18年2月7日、茨城県竜ヶ崎土木事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

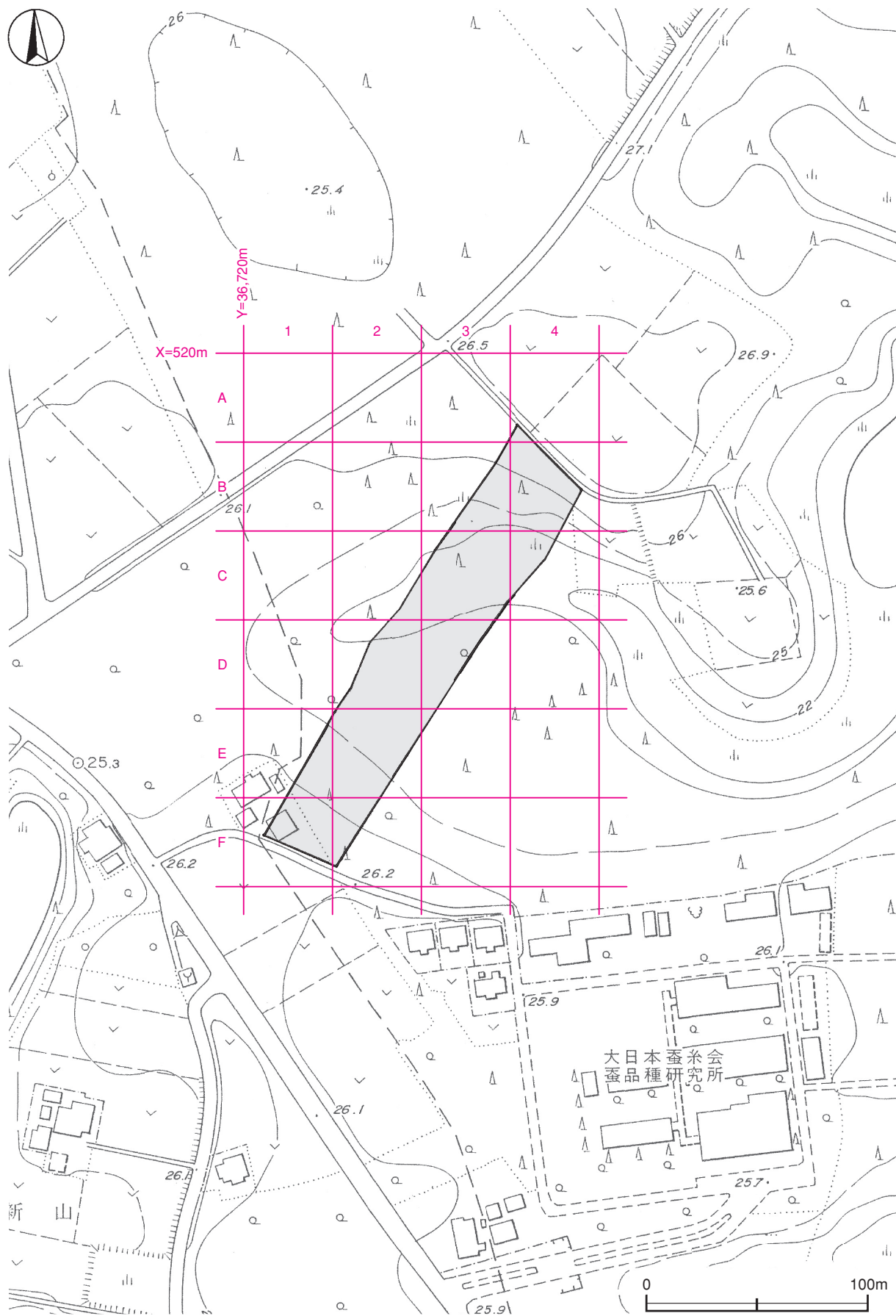
平成18年2月15日、茨城県竜ヶ崎土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書が提出された。平成18年2月22日、茨城県教育委員会教育長は茨城県竜ヶ崎土木事務所長あてに、二重堀遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県竜ヶ崎土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成18年4月1日～平成18年5月31日まで発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

二重堀遺跡の調査は、平成18年4月1日から同年5月31日まで実施した。その概要を表で記載する。

工程	月	4月		5月	
調査準備 表土除去 遺構確認		■			
遺構調査			■		
遺物洗浄 注記 写真整理				■	
補足調査 撤収					■



第1図 二重堀遺跡調査区設定図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

二重堀遺跡は、茨城県稲敷郡阿見町字二重堀1,195番地の2ほかに所在している。

遺跡が所在する阿見町は、茨城県の南部に位置し、北は霞ヶ浦南岸に面している。地形は、稲敷台地と呼ばれる標高20～30mの洪積台地と、小野川を含む霞ヶ浦水系による沖積低地からなっている。この台地は、北西方向のつくば市から南東方向の稲敷市へと続く筑波・稲敷台地のほぼ中央部に当たる。市域の稲敷台地は、小野川支流の乙戸川と桂川、霞ヶ浦に直接流れ込む清明川によって細かく分かれるが、いずれの台地上もごく緩やかな起伏をもち、縁辺部は多数の谷津が複雑に入り組み、樹枝状に開析されている。

稲敷台地の地層は、第四紀洪積世古東京湾時代に堆積した成田層が基盤となり、下部から上部にかけて成田層下部、成田層上部、龍ヶ崎砂礫層、常総粘土層、関東ローム層、表土層の順に堆積している。堆積状況は、水平かつ単調である。

当遺跡は、桂川と清明川に挟まれた標高24～26mの台地上に立地している。特に、二重の土塁と堀跡は、桂川水系の谷津頭と清明川水系の谷津頭を結ぶ「堀切」状に造られている。遺跡の調査前の現況は山林である。

第2節 歴史的環境

二重堀遺跡〈①〉の所在する地域は、台地、低地、河川、湖沼と変化に富んだ自然環境を示し、稲敷台地上には、旧石器時代から近世までの遺跡が多数分布している。ここでは、『茨城県遺跡地図』¹⁾に登録されている当該地域の主な遺跡を中心に、時代ごとに概観する。

旧石器時代の遺跡として、明確な生活の痕跡を確認できるものは少ないが、清明川右岸の星合遺跡〈2〉で5か所²⁾、桂川左岸の薬師入遺跡〈3〉で2か所³⁾、乙戸川左岸の谷ノ沢遺跡〈4〉で2か所⁴⁾の石器集地点がそれぞれ調査されている。

縄文時代の遺跡は、台地上や縁辺部に集落跡や貝塚が点在している。清明川左岸の宮平貝塚〈5〉は前期から中期の貝塚で、戦前から数回にわたって調査が行われており、大小6か所の貝塚によって構成された大規模な馬蹄形貝塚であることが確認されている⁵⁾。島津貝塚〈6〉を含む島津遺跡〈7〉は中期から後期の大規模な集落跡で、住居跡と袋状・円筒状土坑・地点貝塚のほか、早期の炉穴も調査されている^{6～9)}。また、東側に存在するイタチ内貝塚〈8〉・イタチ内古墳群〈9〉で前・中期の住居跡と円筒状土坑・地点貝塚¹⁰⁾、道心台遺跡〈10〉で中・後期の円筒状土坑¹¹⁾がそれぞれ調査されている。清明川右岸では中ノ台遺跡〈11〉で前期¹²⁾、星合遺跡で中期の住居跡がそれぞれ調査されている。桂川左岸の赤塚遺跡〈12〉は中期の大規模な集落跡で、住居跡と袋状・円筒状土坑が調査されている¹³⁾。また、薬師入遺跡で前期の住居跡と早期の炉穴、ナギ山遺跡〈13〉で中・後期の住居跡^{14・15)}、柏峯B遺跡〈14〉で早期から後期の遺物包含層¹⁶⁾がそれぞれ調査されている。その他、当遺跡のように、早・前期の陥し穴が確認された狩猟場と思われる遺跡として、清明川右岸の中ノ台遺跡、桂川左岸の下原遺跡〈15〉¹⁷⁾・薬師入遺跡、桂川右岸の大日遺跡〈16〉^{18・19)}、乙戸川左岸の谷ノ沢遺跡、下小池遺跡〈17〉^{20・21)}がある。

弥生時代の遺跡は少ないが、近年、後期集落の調査例が増えている。清明川左岸では島津遺跡で5軒、頭田

遺跡〈18〉で9軒²²⁾、桂川左岸では薬師入遺跡で4軒、桂川右岸では花房遺跡〈19〉で2軒²³⁾、乙戸川左岸では下小池遺跡で1軒の住居跡がそれぞれ調査されている。その内、島津遺跡・頭田遺跡からは、上稲吉系土器群とともに、南関東系土器あるいはそれに続く古式土師器が同一住居跡内から出土している。

古墳時代の遺跡は、台地上や縁辺部に集落跡や古墳が点在している。清明川左岸では島津遺跡及び貝塚で前期から後期、道心台遺跡で後期の集落跡がそれぞれ調査されている。また、イタチ内古墳群では前期から後期の集落跡と、後期の方墳3基が調査されている。これらの方墳の埋葬施設は、いずれも周溝から羨道がのびる横穴式石室である。清明川右岸では星合遺跡で前・後期の集落跡が調査されており、早い段階に竈を導入していたことが判明している。桂川左岸では下原遺跡、桜立遺跡〈20〉で前期の集落跡がそれぞれ調査されている^{24・25)}。また、薬師入遺跡では前期から中期の住居跡と後期の土坑墓、南側に隣接するナギ山遺跡では中期から後期の住居跡・掘立柱建物跡と方形周溝状遺構がそれぞれ調査されている。桂川右岸では花房遺跡で中期、手接遺跡〈21〉で後期の集落跡がそれぞれ調査されている²⁶⁾。乙戸川左岸では下小池遺跡で前期から後期、下小池東遺跡〈22〉で中期から後期の集落跡がそれぞれ調査されている^{27・28)}。

奈良時代に編纂された『常陸国風土記』によると、信太郡は東を「信太流海」、南を「榎浦流海」、西を「毛野河」によって囲まれ、北側が「河内郡」に接していた²⁹⁾。また、平安時代に編纂された『倭名類聚抄』によると、信太郡は大野、高来、小野、朝夷、高田、子方、志万、中家、島津、信太、乗浜、稲敷、阿弥、駅家の14郷に分かれていた。当遺跡が所在する飯倉は、『新編常陸国誌』によると子方郷内に比定されている³⁰⁾。清明川左岸では島津遺跡及び貝塚・頭田遺跡・梶内台遺跡〈23〉³¹⁾で8～10世紀、道心台遺跡で9世紀の集落跡がそれぞれ調査されており、これらは島津郷内の村落に比定されている。さらに、頭田遺跡・梶内台遺跡では鍛冶工房跡、道心台遺跡では大形土坑も確認されている。清明川右岸では星合遺跡、中ノ台遺跡で9～10世紀の集落跡がそれぞれ調査されており、これらは子方郷内の村落に比定されている。さらに、星合遺跡では火葬墓・土坑墓も確認されている。桂川左岸では篠崎A遺跡〈24〉³²⁾で9世紀、桂川右岸では大日遺跡で8～9世紀、花房遺跡で9世紀、乙戸川左岸では下小池遺跡で8～9世紀の集落跡がそれぞれ調査されており、これらは高来郷内の村落に比定されている。さらに、大日遺跡・花房遺跡、近くの手接遺跡では火葬墓、下小池遺跡では土坑墓も確認されている。

平安時代末期には古代の郡の解体が進み、信太郡内も小野川を挟んで東西に分かれ、東には東条庄、西には信太庄がそれぞれ立庄され、中世へとつながっていく。しかし、鎌倉時代の信太庄域については、考古学的に不明な部分が多い。南北朝時代末期になると、関東管領上杉氏被官の土岐原氏が信太庄惣政所として当地域に移住してくる。土岐原（土岐）氏は江戸崎城を居城とし、戦国時代ここを拠点に一大勢力を築いた。その勢いは、天正18（1590）年の佐竹氏による常陸国統一まで約200年間続いた。当地域の中世城館跡は、この土岐原氏の一族、あるいは家臣のものと考えられている。清明川左岸には塙城跡〈25〉・島津城跡〈26〉、清明川右岸には若栗寄居館跡〈27〉・上条城跡〈28〉、乙戸川左岸には上長館跡〈29〉・下小池城跡〈30〉・福田城跡〈31〉・久野城跡〈32〉がそれぞれ存在している³³⁾。この内、若栗寄居館跡は主郭に当たる部分と、それを囲む土塁と堀が調査され³⁴⁾、下小池城跡はⅡ郭とⅢ郭の虎口に当たる部分と、周囲の土塁と堀が調査されている³⁵⁾。また、当遺跡のように、二つの谷津頭を結ぶ「堀切」状の土塁と堀によって構成され、城館本体の防御だけでなく、台地上の通行を遮断するための城郭関連遺跡も存在している。新堀遺跡〈33〉は約600m離れて北と南に平行して存在し、双方とも桂川水系の谷津頭どうしを掘り切っている³⁶⁾。大堀遺跡〈34〉は清明川水系と桂川水系、割目遺跡〈35〉は清明川水系と沼里川水系、雀ノ久保遺跡〈36〉は清明川水系と沼里川水系、内堀遺跡〈37〉は清明川水系のそれぞれ谷津頭どうしを掘り切っており、いずれの遺跡も台地上の「江戸崎街

道」を遮断するようなかたちで構築されている³⁷⁾。この内、割目遺跡と内堀遺跡は土塁と堀の調査が行われており、ある程度様相をつかむことができる^{38)・39)}。その他、中世の遺跡として、清明川左岸の島津貝塚で堀跡・方形堅穴遺構・土坑墓・粘土貼土坑・火葬土坑・地下式坑・井戸跡、島津遺跡・道心台遺跡で方形堅穴遺構、イタチ内古墳群で土坑墓、頭田遺跡で塚、梶内台遺跡で堀跡・方形堅穴遺構がそれぞれ調査されている。また、桂川左岸の篠崎A遺跡で土坑墓・地下式坑、薬師入遺跡で火葬土坑、ナギ山遺跡で溝跡・粘土貼土坑・地下式坑がそれぞれ調査されている。

近世初期、佐竹義宣は江戸崎城に弟の芦名盛重を配して領国経営に当たったが、慶長7（1602）年に秋田へ国替えとなる。飯倉地区はその後直轄領となるが、慶長11（1606）年には伊達政宗の領地となり、仙台藩領の飛び地としてその支配は幕末まで続いた。近世の遺跡は少ないが、ナギ山遺跡で炭焼窯跡が調査されている。

※ 文中の〈 〉内の番号は、表1、第2図の該当遺跡番号と同じである。

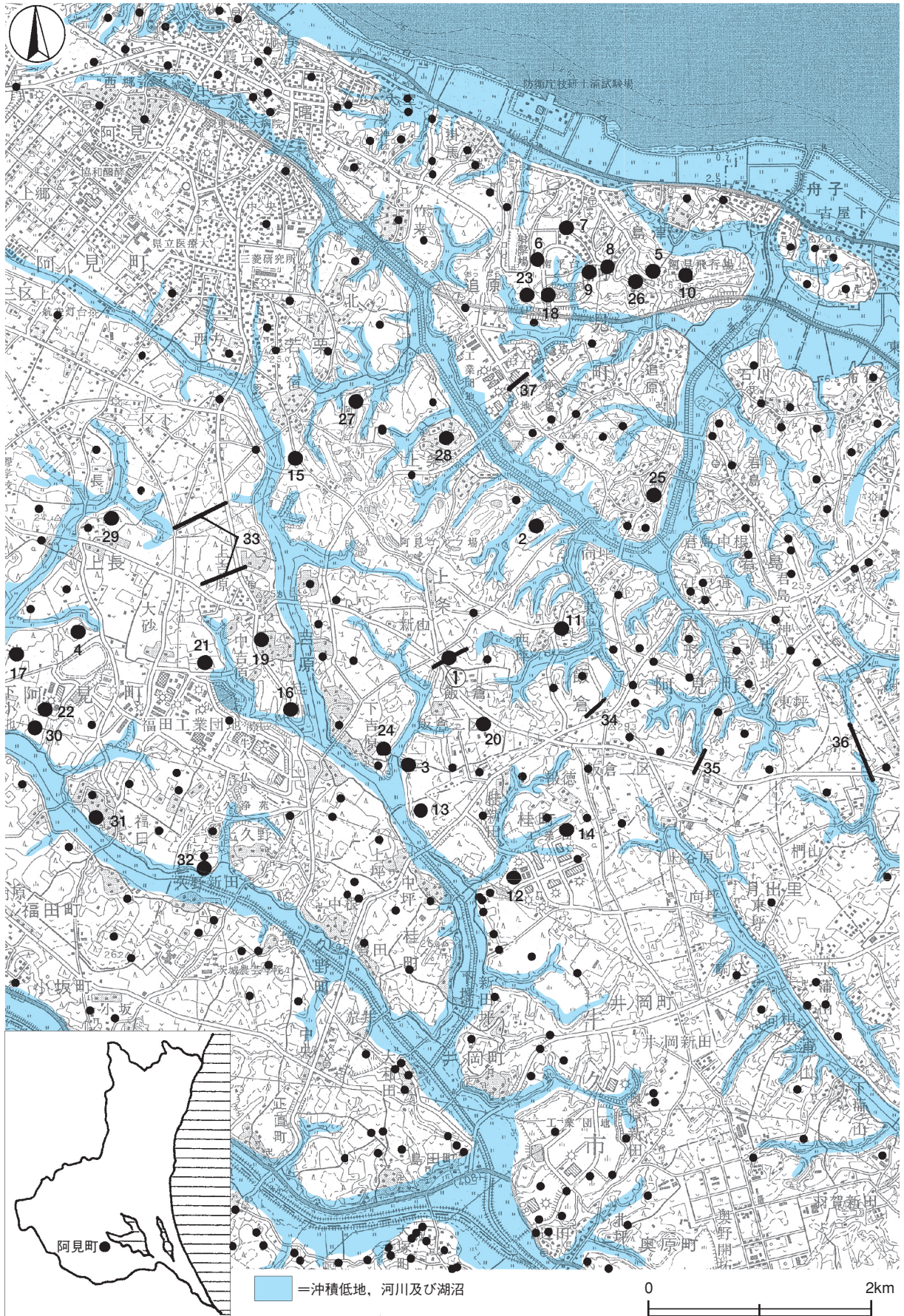
註

- 1) 茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2001年3月
- 2) 矢ノ倉正男ほか「星合遺跡・中ノ台遺跡 阿見東部工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第137集 1997年9月
- 3) 駒澤悦郎「薬師入遺跡 阿見吉原土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第239集 2005年3月
- 4) 綿引英樹ほか「谷ノ沢遺跡・手接遺跡・花房遺跡・大日遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第212集 2004年3月
- 5) 茨城県史編さん原始古代史専門委員会編『茨城県史料 考古資料編－先土器・縄文時代－』茨城県 1979年3月
- 6) 高木國男ほか『島津遺跡（イタチ内古墳群・イタチ内貝塚・島津5・6区）発掘調査報告書』阿見町教育委員会 1994年9月
- 7) 汀安衛『島津遺跡発掘調査報告書』阿見町教育委員会 1997年3月
- 8) 高木國男ほか『島津遺跡（貝塚島津1・2区）発掘調査報告書』阿見町教育委員会 1998年9月
- 9) 高木國男ほか『島津遺跡（島津1・2・3・4区）発掘調査報告書』阿見町教育委員会 1998年9月
- 10) 前掲註6) に同じ。
- 11) 河野辰男ほか『道心台遺跡発掘調査報告書』阿見町教育委員会 1978年3月
- 12) 前掲註2) に同じ。
- 13) 河野辰男ほか『赤塚遺跡発掘調査報告書』牛久町教育委員会 1984年9月
- 14) 石川義信ほか「ナギ山遺跡1・柏峯B遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第233集 2005年3月
- 15) 栗田功「ナギ山遺跡2（仮称）阿見東ICランプB区間整備事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第277集 2007年3月
- 16) 前掲註14) に同じ。
- 17) 小川和博ほか『下原遺跡』阿見町教育委員会 1998年3月
- 18) 前掲註4) に同じ。
- 19) 綿引英樹「下小池遺跡2・大日遺跡2 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第252集 2006年3月

- 20) 小竹茂美ほか「下小池遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第210集 2004年3月
- 21) 前掲註19) に同じ。
- 22) 高木國男ほか『烏津遺跡(頭田遺跡)発掘調査報告書』阿見町教育委員会 1993年9月
- 23) 前掲註4) に同じ。
- 24) 河野辰男ほか『桜立遺跡発掘調査報告書』阿見町教育委員会 1982年12月
- 25) 高木國男ほか『桜立遺跡(第3期)発掘調査報告書』阿見町教育委員会 1988年9月
- 26) 前掲註4) に同じ。
- 27) 海老原幸ほか『下小池東遺跡発掘調査報告書』阿見町教育委員会 1979年3月
- 28) 河野辰男ほか『下小池東遺跡第12号・第13号住居址発掘調査報告書』阿見町教育委員会 1981年1月

表1 二重堀遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世			近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世
①	二重堀遺跡		○				○	21	手接遺跡				○	○		
2	星合遺跡	○	○		○	○		22	下小池東遺跡		○		○			
3	薬師入遺跡	○	○	○	○		○	23	梶内台遺跡				○	○	○	
4	谷ノ沢遺跡	○	○					24	篠崎A遺跡				○	○	○	
5	宮平貝塚		○					25	埜城跡						○	
6	烏津貝塚		○		○	○	○	26	烏津城跡						○	
7	烏津遺跡		○	○	○	○	○	27	若栗寄居館跡						○	
8	イタチ内貝塚		○					28	上条城跡						○	
9	イタチ内古墳群		○		○		○	29	上長館跡						○	
10	道心台遺跡		○		○	○	○	30	下小池城跡						○	
11	中ノ台遺跡		○		○	○		31	福田城跡						○	
12	赤塚遺跡		○					32	久野城跡						○	
13	ナギ山遺跡		○		○		○	33	新堀遺跡						○	
14	柏峯B遺跡		○					34	大堀遺跡						○	
15	下原遺跡		○	○	○			35	割目遺跡						○	
16	大日遺跡		○		○	○		36	雀ノ久保遺跡						○	
17	下小池遺跡		○	○	○	○		37	内堀遺跡						○	
18	頭田遺跡		○	○	○	○	○									
19	花房遺跡				○	○	○									
20	桜立遺跡					○										

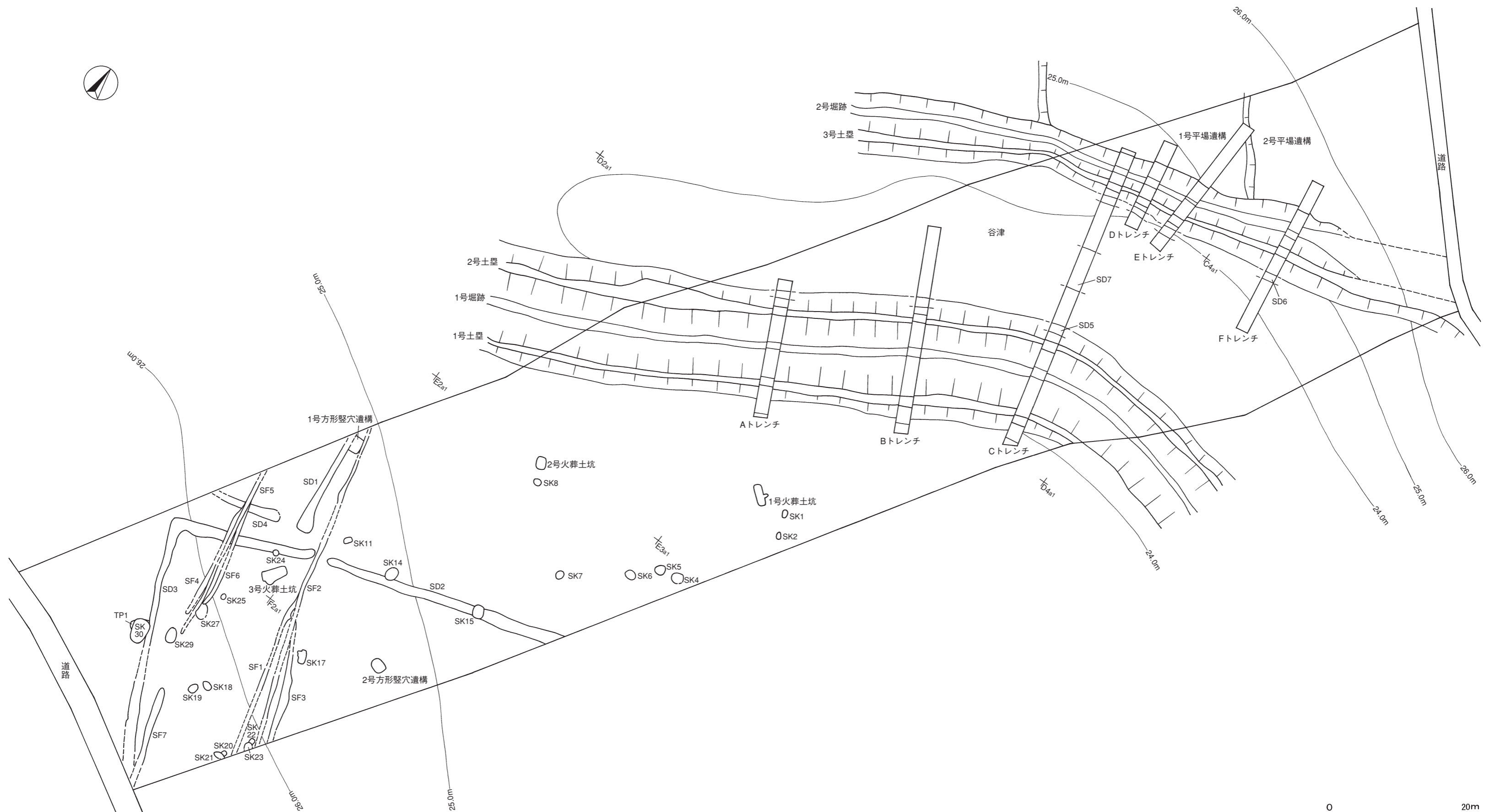


第2図 二重堀遺跡周辺遺跡位置図（国土地理院5分の1地形図「土浦・玉造・龍ヶ崎・佐原」）

- 29) 秋本吉徳『風土記（一） 常陸国風土記』講談社 1979年4月
- 30) 中山信名修・栗田寛補『宮崎報恩会版 新編常陸国誌』崙書房 1979年12月
- 31) 高木國男ほか『梶内台遺跡』阿見町教育委員会 1987年12月
- 32) 小林健太郎「篠崎A遺跡 阿見吉原土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第217集 2004年3月
- 33) 大竹房雄「城館跡」『阿見町史』阿見町 1983年3月
- 34) 高木國男ほか『若栗寄居館遺跡』阿見町教育委員会 1988年3月
- 35) 河野辰男ほか『下小池城跡保存調査報告書』阿見町教育委員会 1981年11月
- 36) 大竹房雄「戦国土塁」『阿見町史』阿見町 1983年3月
- 37) 前掲註36) に同じ。
- 38) 河野辰男ほか『割日遺跡発掘調査報告書』阿見町教育委員会 1979年3月
- 39) 高木國男ほか『内堀遺跡（土塁）発掘調査報告書』阿見町教育委員会 1985年3月

参考文献

- ・茨城県農地部農地計画化課 『土地分類基本調査 土浦』 1982年12月
- ・茨城県農地部農地計画化課 『土地分類基本調査 玉造』 1983年11月
- ・茨城県農地部農地計画化課 『土地分類基本調査 龍ヶ崎』 1986年12月
- ・茨城県農地部農地計画化課 『土地分類基本調査 佐原』 1988年12月



第3図 二重堀遺跡遺構全体図



第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

二重堀遺跡は、茨城県稲敷郡阿見町飯倉字二重堀1,195番地の2ほかに所在し、桂川左岸、清明川右岸、標高24～26mの台地上に立地している。調査面積は8,308㎡で、調査前の現況は山林である。

調査の結果、土塁3条（中世）、堀跡2条（中世）、溝跡7条（中世）、平場遺構2か所（中世）、方形竪穴遺構2基（中世）、陥し穴1基（縄文時代）、火葬土坑3基（中世）、土坑22基（中世9・時期不明13）、道路跡7条（時期不明）が検出されている。遺跡は、中世の土塁と堀が主体の城郭関連遺跡である。

遺物は、収納コンテナ（60×40×20cm）に1箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、土師質土器（小皿・内耳鍋）、陶器（皿・天目茶碗・蓋・鉢・挿鉢・土瓶）、磁器（皿）、石器（搔器・剥片・砥石）、不明鉄製品などである。

第2節 基本層序

基本層序を確認するテストピットは、調査南部のF2d4区に設置した。地表面の標高は25.9mで、地表面から2.1mを掘削し、基本土層図は第4図に示した。土層は10層に分層され、第1層が表土層（腐植土層）、第2～9層が関東ローム層、そして第10層が常総粘土層に対比される。以下、各層の特徴を述べる。

第1層は黒褐色の腐植土層である。粘性・締まりはほとんどなく、層厚は25～35cmである。

第2層は灰黄褐色の表土層とソフトローム層の間層（漸移層）である。粘性は普通で、締まりは弱く、層厚は5～15cmである。

第3層は褐色のソフトローム層である。粘性・締まりは普通で、層厚は5～20cmである。

第4層は灰褐色のソフトローム層で、第1黒色帯（BB I）と思われる。粘性・締まりは普通で、層厚は10～35cmである。

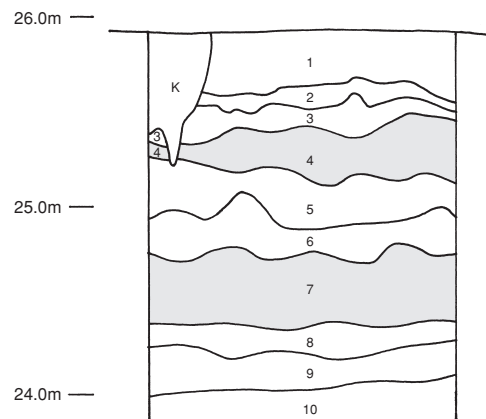
第5層は褐色のソフトローム層とハードローム層の間層（漸移層）である。第5層と第6層の間は不整合面である。粘性・締まりは普通で、層厚は10～30cmである。

第6層は褐色のハードローム層である。ガラス質微粒子（バブル型火山ガラス）を微量含んでいることから、約2.6～2.9万年前に降灰したとされる始良丹沢火山灰（AT）の降灰層と考えられる。粘性・締まりとも強く、層厚は10～30cmである。

第7層は暗褐色のハードローム層で、第2黒色帯（BB II）と思われる。粘性・締まりとも強く、層厚は35～45cmである。

第8層は褐色のハードローム層である。粘性・締まりとも強く、層厚は10～20cmである。

第9層は明褐色のハードローム層と常総粘土層の間層



第4図 基本土層図

(漸移層)である。黒色粒子(鉄分)を微量含む。粘性・縮まりとも極めて強く、層厚は15~25cmである。

第10層はにぶい褐色の常総粘土層である。黒色粒子(鉄分)を微量含む。粘性・縮まりとも極めて強く、層厚は10cm以上である。

遺構は、第3層上面で確認した。

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、陥し穴1基が確認されている。以下、遺構及び遺物について記述する。

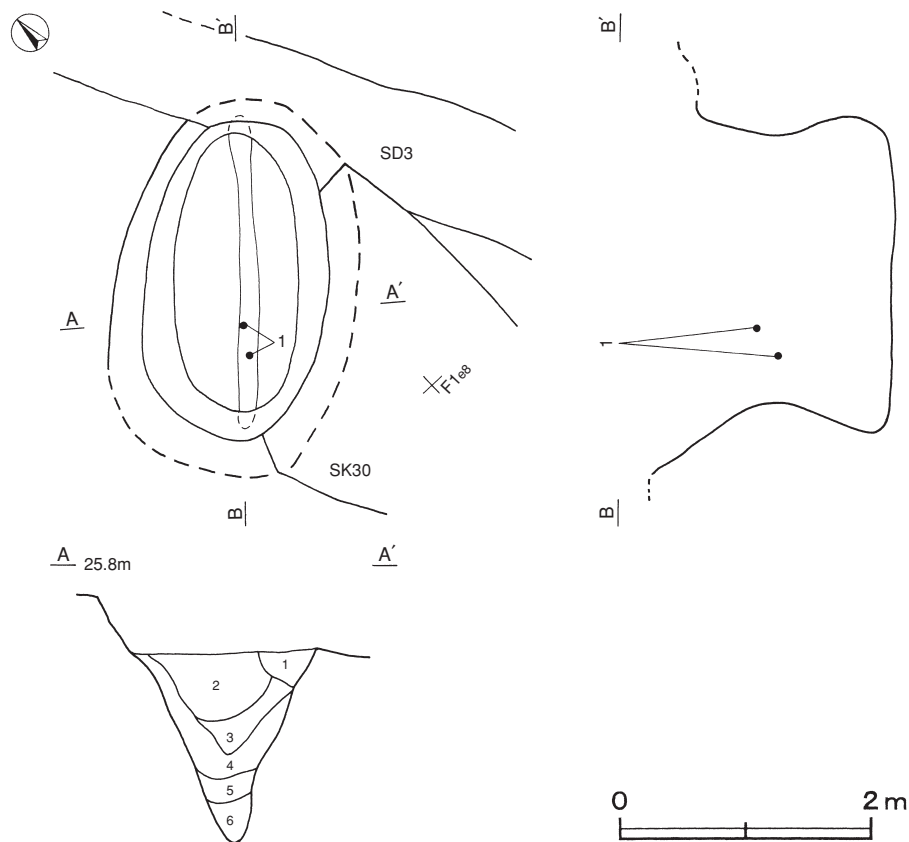
(1) 陥し穴

第1号陥し穴(第5・6図)

位置 調査区南部のF1d7区、標高25.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3号溝、第30号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北東壁上部が第3号溝、南東壁上部が第30号土坑に掘り込まれているが、長径3.0m、短径1.9mの楕円形で、長径方向はN-43°-Eと推定される。深さは194cm、底面はほぼ平坦で、短径方向の断面形はV字状である。壁はほぼ直立している。長径方向の両端は内傾して立ち上がり、開口部近くは外傾している。



第5図 第1号陥し穴実測図

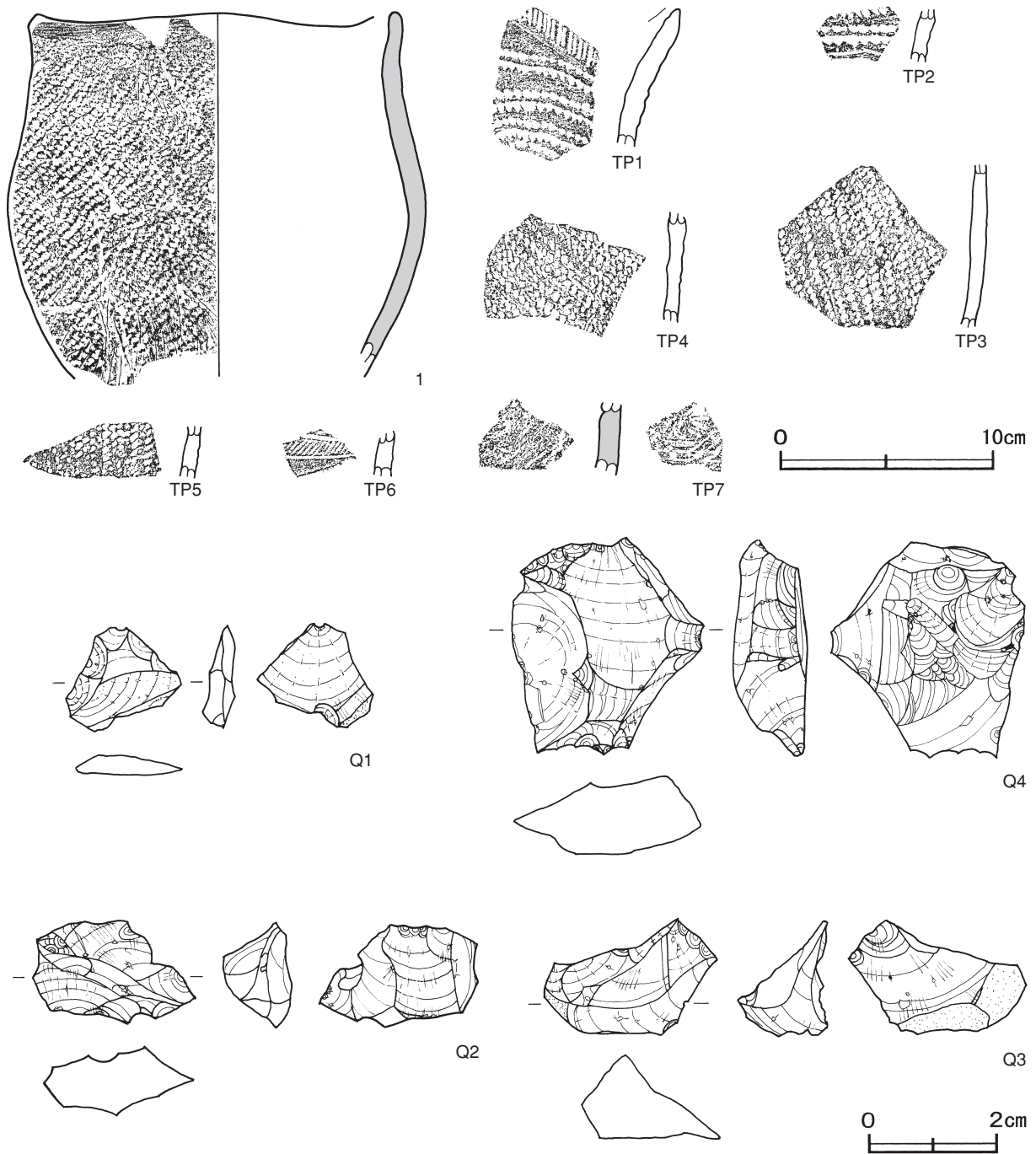
覆土 6層に分けられる。最下層から褐色土層，暗褐色土層と交互に堆積していることや，ロームブロックを多く含むことから人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 | 4 褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量，炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量（3層より締まっている） |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量 | 6 褐色 | ロームブロック多量（4層より締まっている） |

遺物出土状況 縄文土器片1点（深鉢）が出土している。1は中央部の覆土第2層から出土している。

所見 時期は，出土土器から縄文時代前期前半と考えられる。



第6図 縄文時代出土遺物実測図

(2) 遺構外出土遺物 (第6図)

今回の調査で、表土層及び遺構確認面から遺構に伴わない縄文時代の遺物が出土している。ここでは、縄文土器など特徴的な遺物について、実測図及び遺物観察表で掲載する。

第1号陥し穴出土遺物観察表 (第6図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	[17.0]	(17.2)	-	長石・雲母・繊維	にぶい橙	普通	緩やかな波状口縁 口唇部無文 口縁部から胴部単節縄文RLを施文	覆土2層	30% PL5 前期前半

縄文時代遺構外出土遺物観察表 (第6図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP1	縄文土器	深鉢	-	(6.5)	-	長石・石英・雲母	明褐	普通	波状口縁 口唇部半載竹管による縦位の条線文 口縁部から胴部横位の半載竹管による連続爪形文を施文	B4区表土	PL5 前期後半
TP2	縄文土器	深鉢	-	(2.5)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部半載竹管による横位の連続爪形文 貝殻腹縁による貝殻波状文を施文	B4区表土	PL5 前期後半 TP1と同一個体カ
TP3	縄文土器	深鉢	-	(7.7)	-	長石・石英・雲母	明褐	普通	胴部単節縄文RLを施文	D2区表土	PL5 後期前半
TP4	縄文土器	深鉢	-	(5.2)	-	長石・石英・雲母	明褐	普通	胴部単節縄文RLを施文	D2区表土	PL5 後期前半 TP3と同一個体カ
TP5	縄文土器	深鉢	-	(2.4)	-	長石・石英・雲母	褐	普通	胴部単節縄文RLを施文	D2区表土	PL5 後期前半 TP3と同一個体カ
TP6	縄文土器	深鉢	-	(2.2)	-	長石・石英・雲母	明褐	普通	胴部沈線区画内単節縄文RLを充填	E2区表土	PL5 後期前半
TP7	縄文土器	深鉢	-	(3.5)	-	長石・雲母・繊維	明褐	普通	胴部外・内面貝殻条痕文を施文	F1区表土	PL5 早期後半

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	剥片	1.7	1.9	0.5	1.0	安山岩	両面多方向から剥離痕 1面に礫面が残る	SK15覆土中	PL5
Q2	剥片	1.6	2.5	1.1	3.1	黒曜石	両面多方向から剥離痕	D2h9区遺構確認面	PL5
Q3	剥片	1.8	2.8	1.4	3.1	黒曜石	両面多方向から剥離痕 3面に礫面が残る	E2a0区遺構確認面	PL5
Q4	搔器	3.4	3.0	1.3	11.1	黒曜石	端部に急角度調整で刃部を設ける	E3a1区遺構確認面	PL5

2 中世の遺構と遺物

当時代の遺構は、土塁3条、堀跡2条、溝跡7条、平場遺構2か所、方形竪穴遺構2基、火葬土坑3基、土坑9基が確認されている。以下、遺構及び遺物について記述する。なお、調査区北部から中央部にかけて位置している土塁3条、堀跡2条及び溝跡3条は、遺構に対して直行するようなトレンチを6本設定し、調査を行った(A~Fトレンチ)。

(1) 土塁

第1号土塁 (第7・8図)

位置 調査区中央部のC4h1~D2h3区、標高25.5mの台地縁辺部に位置している。

調査 A~Cトレンチを設定した。

規模と形状 北東側及び南西側が調査区域外に延びるため、確認できた長さは80.0mである。主軸方向はN-60~80°-Eで、北東部が少し東側に彎曲する。Aトレンチで確認できた規模は、下幅7.0m、上幅1.4m、旧地表面からの高さ1.2m、現表土を含めた高さ1.4m、第1号堀底面からの高さ4.8mである。Bトレンチで確認できた規模は、下幅6.0m、上幅1.6m、旧地表面からの高さ1.0m、現表土を含めた高さ1.1m、第1号堀底面からの高さ5.0mである。

Cトレンチで確認できた規模は、下幅6.0m、上幅1.2m、旧地表面からの高さ0.7m、現表土を含めた高さ0.9m、第1号堀底面からの高さ4.4mである。断面形は台形で、両壁は外傾しながら立ち上がり、北側は傾斜角度がやや急である。

構築状況 確認できた本跡の構築土は、Aトレンチで第3～9層の7層、Bトレンチで第2～8層の7層、Cトレンチで第2～7層の6層である。一部に粘土を含んだ締まりの強い土層も見られるが、全体的に締まりの弱い土層が多く、叩き締めや突き固めはあまり認められない。また、補修や拡大の痕跡も認められない。

所見 本跡は、台地縁辺部の地形に沿って、土塁・堀群の一番南側に構築された土塁である。北側に平行して位置する第1号堀、第2号土塁、さらに自然の谷津を挟んで北側に平行して位置する第3号土塁、第2号堀と合わせて一体となる遺構群の一つである。構築方法は、第1号堀の掘削土を、基本的には叩き締めや突き固めをせずに、掻き上げ、盛り上げて築いている。また、補修や拡大の痕跡も認められず、一過性の土塁と思われる。本跡に伴う遺物は出土していないが、時期は他の遺構・遺物、及び他の遺跡の類似遺構から中世後半の16世紀代と考えられる。

第2号土塁（第7・8図）

位置 調査区中央部のC 4 f3～D 2 d5区、標高23.5mの台地縁辺部に位置している。

調査 A～Cトレンチを設定した。

規模と形状 北東側及び南西側が調査区域外に延びるため、確認できた長さは79.0mである。主軸方向はN-60°～90°-Eで、北東部が東側に彎曲する。Aトレンチで確認できた規模は、下幅4.0m、上幅1.3m、旧地表面からの高さ1.1m、現表土を含めた高さ1.2m、第1号堀底面からの高さ3.8mである。Bトレンチで確認できた規模は、下幅4.0m、上幅1.4m、旧地表面からの高さ0.9m、現表土を含めた高さ1.1m、第1号堀底面からの高さ3.3mである。Cトレンチで確認できた規模は、下幅4.5m、上幅1.3m、旧地表面からの高さ1.4m、現表土を含めた高さ1.6m、第1号堀底面からの高さ3.1mである。断面形は台形で、両壁は外傾しながら立ち上がり、南側は傾斜角度がやや急である。また、本跡北端に沿って、第5号溝跡が掘り込まれている。

構築状況 確認できた本跡の構築土は、Aトレンチで第23～28層の6層、Bトレンチで第18～22層の5層、Cトレンチで第18～24層の7層である。一部に粘土を含んだ締まりの強い土層も見られるが、全体的に締まりの弱い土層が多く、叩き締めや突き固めはあまり認められない。また、補修や拡大の痕跡も認められない。

所見 本跡は、台地縁辺部の地形に沿って、土塁・堀群の南側から二番目に構築された土塁である。南側に平行して位置する第1号堀、第1号土塁、さらに自然の谷津を挟んで北側に平行して位置する第3号土塁、第2号堀と合わせて一体となる遺構群の一つである。構築方法は、第1号堀の掘削土を、基本的には叩き締めや突き固めをせずに、掻き上げ、盛り上げて築いている。また、補修や拡大の痕跡も認められず、一過性の土塁と思われる。本跡に伴う遺物は出土していないが、時期は他の遺構・遺物、及び他の遺跡の類似遺構から中世後半の16世紀代と考えられる。

第3号土塁（第7～9図）

位置 調査区北部のB 4 h8～C 3 a4区、標高23.0mの台地縁辺部に位置している。

調査 C～Fトレンチを設定した。

規模と形状 北東側及び南西側が調査区域外に延びるため、確認できた長さは62.0mである。主軸方向はN-70°～80°-Eで、北東部が少し北側に振れ、高低差が少なくなっていく。Cトレンチで確認できた規模は、下幅2.0m、上幅1.0m、旧地表面からの高さ0.4m、現表土を含めた高さ0.6m、第2号堀底面からの高さ1.8mである。

Dトレンチで確認できた規模は、下幅2.5m、上幅1.0m、旧地表面からの高さ0.6m、現表土を含めた高さ0.8m、第2号堀底面からの高さ2.0mである。Eトレンチで確認できた規模は、下幅2.4m、上幅1.2m、旧地表面からの高さ0.7m、現表土を含めた高さ0.8m、第2号堀底面からの高さ2.1mである。Fトレンチで確認できた規模は、下幅4.5m、上幅1.2m、旧地表面からの高さ0.5m、現表土を含めた高さ0.6m、第2号堀底面からの高さ1.7mである。断面形は台形で、両壁は外傾しながら立ち上がり、北側は傾斜角度がやや急である。また、本跡南端に沿って、第6号溝跡が掘り込まれている。

構築状況 確認できた本跡の構築土は、Cトレンチで第31～33層の3層、Dトレンチで第2・3層の2層、Eトレンチで第2～4層の3層、Fトレンチで第2～4層の3層である。一部に粘土を含んだ締まりの強い土層も見られるが、全体的に締まりの弱い土層が多く、叩き締めや突き固めはあまり認められない。また、補修や拡大の痕跡も認められない。

所見 本跡は、台地縁辺部の地形に沿って、土塁・堀群の一番北側に構築された土塁である。北側に平行して位置する第2号堀、さらに自然の谷津を挟んで南側に平行して位置する第2号土塁、第1号堀、及び第1号土塁と合わせて一体となる遺構群の一つである。構築方法は、第2号堀の掘削土を、基本的には叩き締めや突き固めをせずに、掻き上げ、盛り上げて築いている。また、補修や拡大の痕跡も認められず、一過性の土塁と思われる。本跡に伴う遺物は出土していないが、時期は他の遺構・遺物、及び他の遺跡の類似遺構から中世後半の16世紀代と考えられる。

(2) 堀跡

第1号堀跡 (第7・8図)

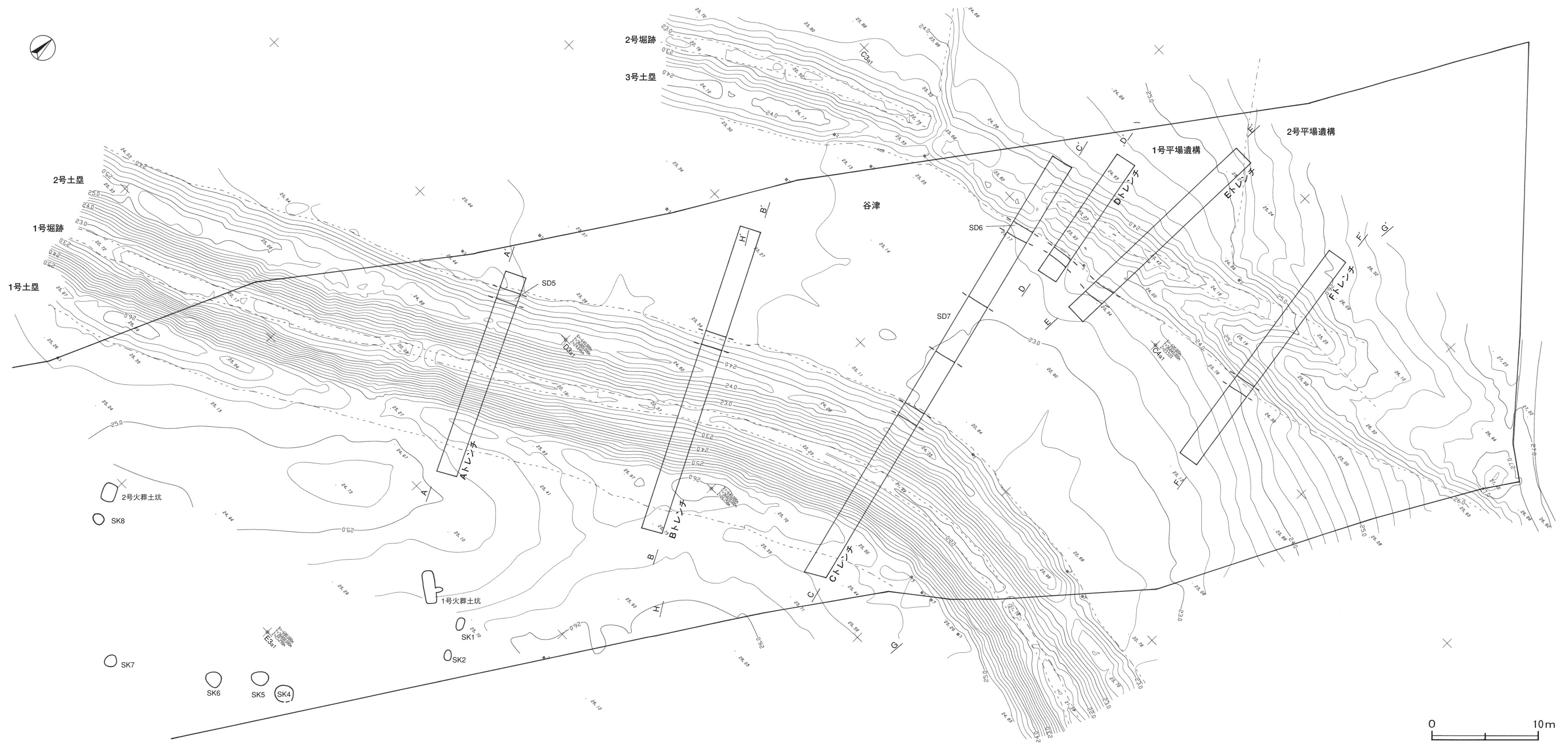
位置 調査区中央部のC4g2～D2f4区、標高24.5mの台地縁辺部に位置している。

調査 A～Cトレンチを設定した。

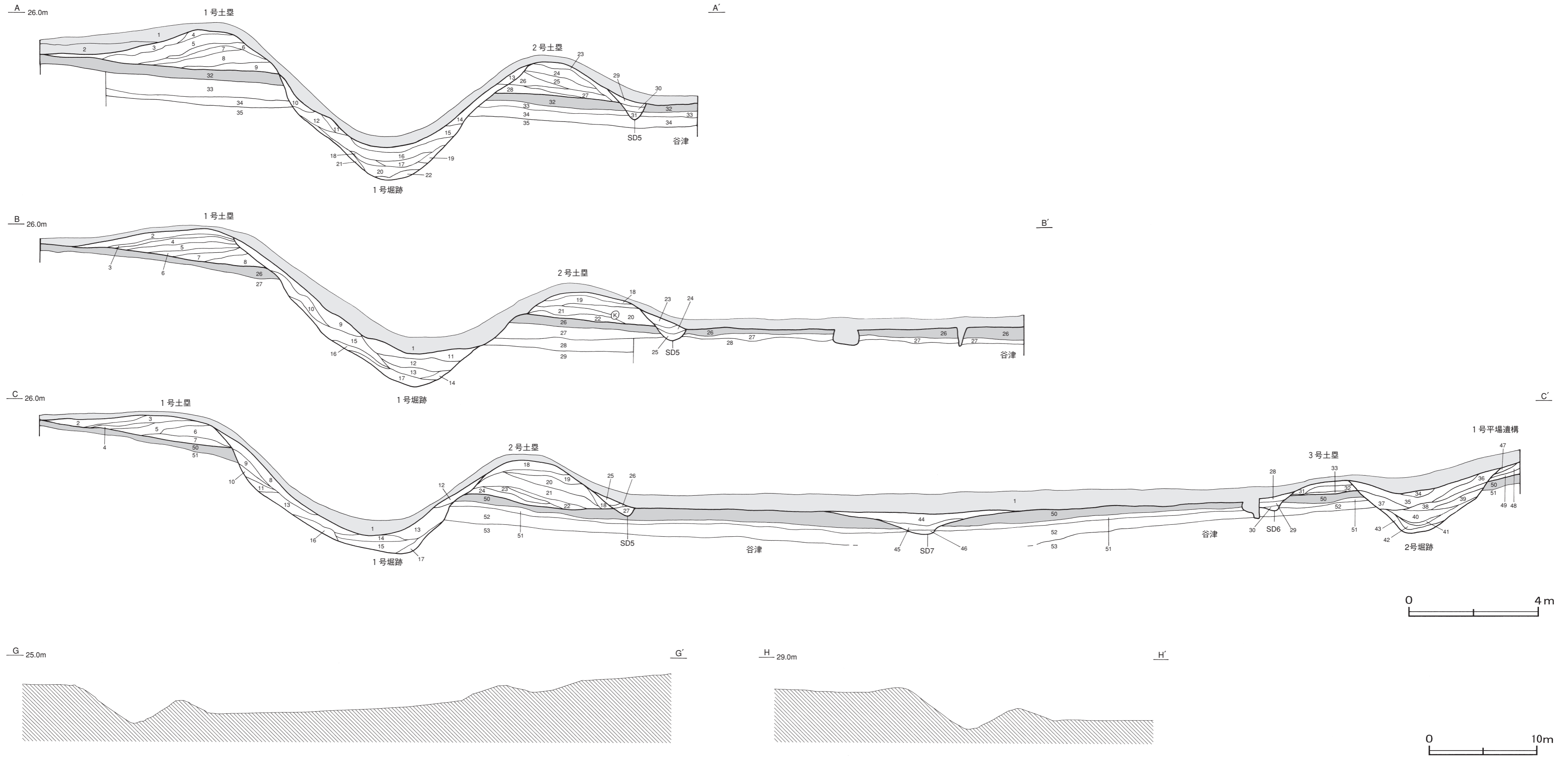
規模と形状 北東側及び南西側が調査区域外に延びるため、確認できた長さは82.0mである。主軸方向はN-60°～90°-Eで、北東部が東側に彎曲する。Aトレンチで確認できた規模は、上幅6.6m、下幅0.9m、旧地表面からの深さ3.2m、第1号土塁からの深さ4.8m、第2号土塁からの深さ3.8mである。Bトレンチで確認できた規模は、上幅8.2m、下幅1.3m、旧地表面からの深さ3.7m、第1号土塁からの深さ5.0m、第2号土塁からの深さ3.3mである。Cトレンチで確認できた規模は、上幅7.3m、下幅1.5m、旧地表面からの深さ3.2m、第1号土塁からの深さ4.4m、第2号土塁からの深さ3.1mである。断面形が逆台形の箱葉研の堀で、両壁は外傾しながら立ち上がり、北側は傾斜角度がやや急である。

覆土 Aトレンチで第10～22層の13層、Bトレンチで第9～17層の9層、Cトレンチで第8～17層の10層にそれぞれ分けられる。堀の左右両側壁からの崩落土、及び第1・2号土塁からの崩落土を主体としており、自然堆積である。掘り直しや掘り浚えの痕跡は認められない。

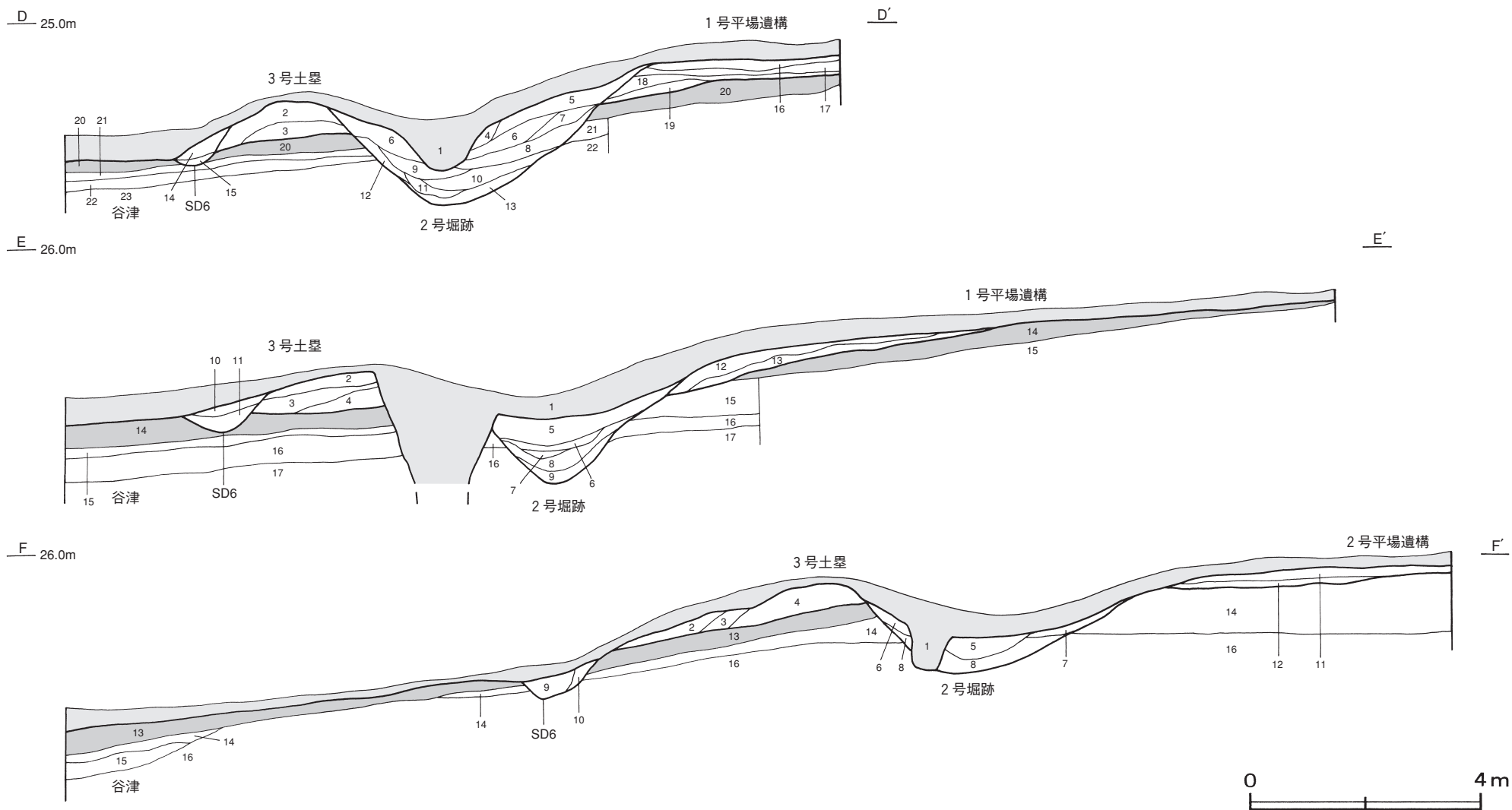
所見 本跡は、台地縁辺部の地形に沿って、土塁・堀群の一番南側に掘削された堀跡である。南側に平行して位置する第1号土塁、北側に平行して位置する第2号土塁、さらに自然の谷津を挟んで北側に平行して位置する第3号土塁、第2号堀と合わせて一体となる遺構群の一つである。桂川水系の谷津頭と清明川水系の谷津頭を結ぶ「堀切」状に掘削されており、その掘削土を左右に盛り上げ、第1・2号土塁の構築土として使用している。また、掘り直しや掘り浚えの痕跡は認められず、土塁群とともに一過性の堀と思われる。本跡に伴う遺物は出土していないが、時期は他の遺構・遺物、及び他の遺跡の類似遺構から中世後半の16世紀代と考えられる。



第7図 第1～3号土塁，第1・2号堀跡，第5～7号溝跡，第1・2号平場遺構実測図



第8図 第1～3号土塁，第1・2号堀跡，第5～7号溝跡，第1号平場遺構実測図



第9図 第3号土塁，第2号堀跡，第6号溝跡，第1・2号平場遺構実測図

A トレンチ土層解説

- 1 黒褐色 表土上層
- 2 黒褐色 表土下層
- 第1号土塁**
- 3 黒褐色 ロームブロック少量，炭化粒子・砂粒微量
- 4 灰黄褐色 粘土粒子中量，砂粒少量，ローム粒子微量
- 5 灰黄褐色 粘土ブロック中量，ロームブロック少量，砂粒微量
- 6 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック微量
- 7 黒褐色 ローム粒子微量
- 8 黒褐色 ロームブロック微量
- 9 黒褐色 ロームブロック少量
- 第1号堀跡**
- 10 黒色 ローム粒子微量
- 11 黒褐色 ローム粒子微量
- 12 黒色 ローム粒子・粘土粒子微量

- 13 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量
- 14 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子微量
- 15 黒褐色 焼土粒子・粘土粒子微量
- 16 黒褐色 粘土ブロック少量，ローム粒子・焼土粒子微量
- 17 褐灰色 粘土粒子微量
- 18 黒褐色 粘土ブロック中量
- 19 褐灰色 粘土ブロック中量
- 20 褐灰色 粘土ブロック中量，砂粒少量
- 21 黒色 粘土粒子中量，砂粒少量
- 22 黄灰色 粘土ブロック・砂粒微量
- 第2号土塁**
- 23 灰黄褐色 砂粒少量，ローム粒子・粘土粒子微量
- 24 灰黄褐色 粘土粒子中量，砂粒少量，ローム粒子微量
- 25 灰黄褐色 粘土ブロック中量，ロームブロック少量，砂粒微量

- 26 黒褐色 ローム粒子微量
- 27 黒褐色 粘土ブロック少量，ローム粒子・砂粒微量
- 28 黒褐色 ロームブロック少量
- 第5号溝跡**
- 29 灰黄褐色 砂粒少量，ローム粒子・粘土粒子微量
- 30 黒褐色 ローム粒子微量
- 31 黒褐色 ローム粒子微量
- 地山**
- 32 黒色 ローム粒子・炭化粒子微量(土塁構築時旧表土層)
- 33 褐色 ローム粒子多量
- 34 黒色 ローム粒子・粘土粒子微量
- 35 にぶい黄褐色 粘土粒子多量

B トレンチ土層解説

- 1 黒褐色 表土層
- 第1号土塁**
- 2 黒褐色 粘土ブロック中量，砂粒少量，ローム粒子微量
- 3 灰黄褐色 砂粒少量，ローム粒子・粘土粒子微量
- 4 灰黄褐色 粘土ブロック中量，砂粒少量，ローム粒子微量
- 5 黒褐色 粘土ブロック少量，ローム粒子・砂粒微量
- 6 暗褐色 ロームブロック・粘土粒子微量
- 7 黒褐色 ロームブロック少量
- 8 暗褐色 ロームブロック少量
- 第1号堀跡**
- 9 黒褐色 ローム粒子微量
- 10 黒色 ローム粒子微量

- 11 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子微量
- 12 黒褐色 粘土ブロック少量，ローム粒子・焼土粒子微量
- 13 褐灰色 粘土粒子微量
- 14 褐灰色 粘土ブロック中量，砂粒少量
- 15 黒色 ローム粒子・粘土粒子微量
- 16 黒褐色 粘土ブロック中量
- 17 褐灰色 粘土ブロック中量，砂粒少量
- 第2号土塁**
- 18 灰黄褐色 砂粒少量，ローム粒子・粘土粒子微量
- 19 灰黄褐色 粘土粒子中量，砂粒少量，ローム粒子微量
- 20 灰黄褐色 粘土ブロック中量，砂粒少量，ローム粒子微量
- 21 暗褐色 ロームブロック微量

- 22 暗褐色 ロームブロック少量
- 第5号溝跡**
- 23 灰黄褐色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量
- 24 黒褐色 ローム粒子・砂粒微量
- 25 黒褐色 ローム粒子微量
- 地山**
- 26 黒色 ローム粒子・炭化粒子微量(土塁構築時旧表土層)
- 27 褐色 ローム粒子多量
- 28 黒色 ローム粒子・粘土粒子微量
- 29 にぶい黄褐色 粘土粒子多量

Cトレンチ土層解説

- 1 黒 褐 色 表土層
- 第1号土塁**
- 2 黒 褐 色 ローム粒子少量, 粘土粒子微量
- 3 灰 黄 褐 色 粘土粒子中量, 砂粒少量, ローム粒子微量
- 4 黒 褐 色 ローム粒子・粘土粒子微量
- 5 黒 褐 色 粘土ブロック・ローム粒子微量
- 6 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 7 黒 褐 色 ロームブロック少量
- 第1号堀跡**
- 8 黒 褐 色 ローム粒子・粘土粒子微量
- 9 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 10 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 11 黒 色 ローム粒子・粘土粒子微量
- 12 黒 褐 色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量
- 13 黒 褐 色 粘土ブロック・ローム粒子微量
- 14 黒 褐 色 粘土ブロック少量, ローム粒子・焼土粒子微量
- 15 褐 灰 色 粘土粒子微量
- 16 黒 褐 色 粘土粒子少量
- 17 褐 灰 色 粘土ブロック・砂粒微量
- 第2号土塁**
- 18 灰 黄 褐 色 砂粒少量, ローム粒子・粘土粒子微量
- 19 黒 褐 色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量
- 20 灰 黄 褐 色 粘土粒子中量, 砂粒少量, ローム粒子微量
- 21 灰 黄 褐 色 粘土ブロック中量, 砂粒少量, ローム粒子微量
- 22 灰 黄 褐 色 粘土ブロック中量, ロームブロック少量, 砂粒微量
- 23 灰 褐 色 粘土ブロック少量, ローム粒子微量
- 24 黒 褐 色 ロームブロック・粘土粒子微量
- 第5号溝跡**
- 25 灰 褐 色 砂粒少量, ローム粒子・粘土粒子微量
- 26 黒 褐 色 ローム粒子・砂粒微量
- 27 黒 褐 色 ローム粒子微量

Dトレンチ土層解説

- 1 黒 褐 色 表土層
- 第3号土塁**
- 2 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 黒 褐 色 ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
- 第2号堀跡**
- 4 黒 褐 色 ローム粒子・粘土粒子微量
- 5 黒 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 6 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 7 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 8 暗 褐 色 ローム粒子微量
- 9 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 10 黒 褐 色 砂粒少量, ローム粒子・粘土粒子微量
- 11 黒 褐 色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量
- 12 黒 褐 色 ローム粒子・粘土粒子微量
- 13 黒 褐 色 ローム粒子少量

Eトレンチ土層解説

- 1 黒 褐 色 表土層
- 第3号土塁**
- 2 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 灰 褐 色 粘土粒子・砂粒少量, ローム粒子微量
- 4 黒 褐 色 ロームブロック・粘土粒子微量
- 第2号堀跡**
- 5 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 7 黒 褐 色 ロームブロック微量
- 8 黒 褐 色 砂粒少量, ローム粒子・粘土粒子微量
- 9 黒 褐 色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量

Fトレンチ土層解説

- 1 黒 褐 色 表土層
- 第3号土塁**
- 2 黒 褐 色 粘土ブロック中量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック少量
- 4 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 第2号堀跡**
- 5 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 6 黒 褐 色 ローム粒子少量
- 7 暗 褐 色 ローム粒子微量
- 8 黒 褐 色 ローム粒子・粘土粒子微量

- 第6号溝跡**
- 28 黒 褐 色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量
- 29 黒 褐 色 ローム粒子・砂粒微量
- 30 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 第3号土塁**
- 31 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 32 黒 褐 色 ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
- 33 黒 褐 色 粘土ブロック中量, 砂粒少量
- 第2号堀跡**
- 34 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 35 黒 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 36 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 37 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 38 黒 褐 色 炭化物・ローム粒子微量
- 39 黒 褐 色 ローム粒子少量
- 40 黒 褐 色 砂粒少量, ローム粒子・粘土粒子微量
- 41 褐 色 砂粒中量, 粘土粒子少量
- 42 黒 褐 色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量
- 43 にぶい黄褐色 砂粒少量, ローム粒子・粘土粒子微量
- 第7号溝跡**
- 44 黒 褐 色 炭化物・ローム粒子・砂粒微量
- 45 黒 色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 46 黒 色 ロームブロック少量
- 第1号平場遺構**
- 47 灰 黄 褐 色 砂粒中量, 粘土粒子少量
- 48 黒 褐 色 粘土ブロック・砂粒少量
- 49 にぶい黄褐色 粘土ブロック・砂粒少量
- 地山**
- 50 黒 色 ローム粒子・炭化粒子微量(土塁構築時旧表土層)
- 51 褐 色 ローム粒子多量
- 52 黒 色 ローム粒子・粘土粒子微量
- 53 にぶい黄褐色 粘土粒子多量

- 第6号溝跡**
- 14 黒 色 砂粒少量, 粘土粒子微量
- 15 黒 色 ローム粒子微量
- 第1号平場遺構**
- 16 黒 褐 色 ロームブロック・粘土粒子・砂粒微量
- 17 暗 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 18 黒 褐 色 ローム粒子微量
- 19 暗 褐 色 粘土粒子・砂粒少量, ローム粒子微量
- 地山**
- 20 黒 色 ローム粒子・炭化粒子微量(土塁構築時旧表土層)
- 21 褐 色 ローム粒子多量
- 22 黒 色 ローム粒子・粘土粒子微量
- 23 にぶい黄褐色 粘土粒子多量

- 第6号溝跡**
- 10 黒 褐 色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量
- 11 黒 色 砂粒少量, 粘土粒子微量
- 第1号平場遺構**
- 12 黒 褐 色 ロームブロック微量
- 13 黒 褐 色 ロームブロック・粘土粒子・砂粒微量
- 地山**
- 14 黒 色 ローム粒子・炭化粒子微量(土塁構築時旧表土層)
- 15 褐 色 ローム粒子多量
- 16 黒 色 ローム粒子・粘土粒子微量
- 17 にぶい黄褐色 粘土粒子多量

- 第6号溝跡**
- 9 黒 褐 色 ローム粒子・粘土粒子微量
- 10 褐 色 ローム粒子少量
- 第2号平場遺構**
- 11 黒 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 12 黒 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 地山**
- 13 黒 色 ローム粒子・炭化粒子微量(土塁構築時旧表土層)
- 14 褐 色 ローム粒子多量
- 15 黒 色 ローム粒子・粘土粒子微量
- 16 にぶい黄褐色 粘土粒子多量

第2号堀跡（第7～9図）

位置 調査区北部のB4h5～B3j4区，標高23.5mの台地縁辺部に位置している。

調査 C～Fトレンチを設定した。

規模と形状 北東側及び南西側が調査区域外に延びるため，確認できた長さは61.0mである。主軸方向はN-70°-80°-Eで，北東部が少し北側に振れ，高低差は少なくなっていく。Cトレンチで確認できた規模は，上幅4.0m，下幅0.8m，旧地表面からの深さ1.6m，第3号土塁からの深さ1.8m，第1号平場遺構からの深さ2.2mである。Dトレンチで確認できた規模は，上幅4.2m，下幅1.1m，旧地表面からの深さ1.8m，第3号土塁からの深さ2.0m，第1号平場遺構からの深さ2.4mである。Eトレンチで確認できた規模は，上幅3.0m，下幅0.4m，旧地表面からの深さ1.5m，第3号土塁からの深さ2.2m，第1号平場遺構からの深さ2.2mである。Fトレンチで確認できた規模は，上幅4.3m，下幅1.0m，旧地表面からの深さ1.2m，第3号土塁からの深さ1.6m，第2号平場遺構からの深さ1.6mである。断面形が逆台形の箱薬研の堀で，両壁は外傾しながら立ち上がり，南側は傾斜角度がやや急である。

覆土 Cトレンチで第34～43層の10層，Dトレンチで第4～13層の10層，Eトレンチで第5～9層の5層，Fトレンチで第5～8層の4層に分けられる。堀の左右両側壁からの崩落土，及び第3号土塁，第1・2号平場遺構からの崩落土を主体としており，自然堆積である。掘り直しや掘り浚えの痕跡は認められない。

所見 本跡は，台地縁辺部の地形に沿って，土塁・堀群の一番北側に掘削された堀跡である。南側に平行して位置する第3号土塁，さらに自然の谷津を挟んで南側に平行して位置する第2号土塁，第1号堀，及び第1号土塁と合わせて一体となる遺構群の一つである。桂川水系の谷津頭と清明川水系の谷津頭を結ぶ「堀切」状に掘削されており，その掘削土を左右に盛り上げ，第3号土塁及び第1・2号平場遺構の構築土として使用している。また，掘り直しや掘り浚えの痕跡は認められず，土塁群とともに一過性の堀と思われる。本跡に伴う遺物は出土していないが，時期は他の遺構・遺物，及び他の遺跡の類似遺構から中世後半の16世紀代と考えられる。

表2 土塁一覧表

遺構番号	位置	主軸方向	形状	規模				断面	壁面	盛土	出土遺物	時期	備考 重複関係 (古→新)
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	高さ(m)						
1	C4h1～D2h3	N-60°-80°-E	直線～彎曲	(80.0)	1.2～1.6	6.0～7.0	0.9～1.4	台形	外傾	人為		16世紀	
2	C4f3～D2d5	N-60°-90°-E	直線～彎曲	(79.0)	1.3～1.4	4.0～4.5	1.1～1.6	台形	外傾	人為		16世紀	
3	B4h8～C3a4	N-70°-80°-E	ほぼ直線	(62.0)	1.0～1.2	2.0～4.5	0.6～0.8	台形	外傾	人為		16世紀	

表3 堀跡一覧表

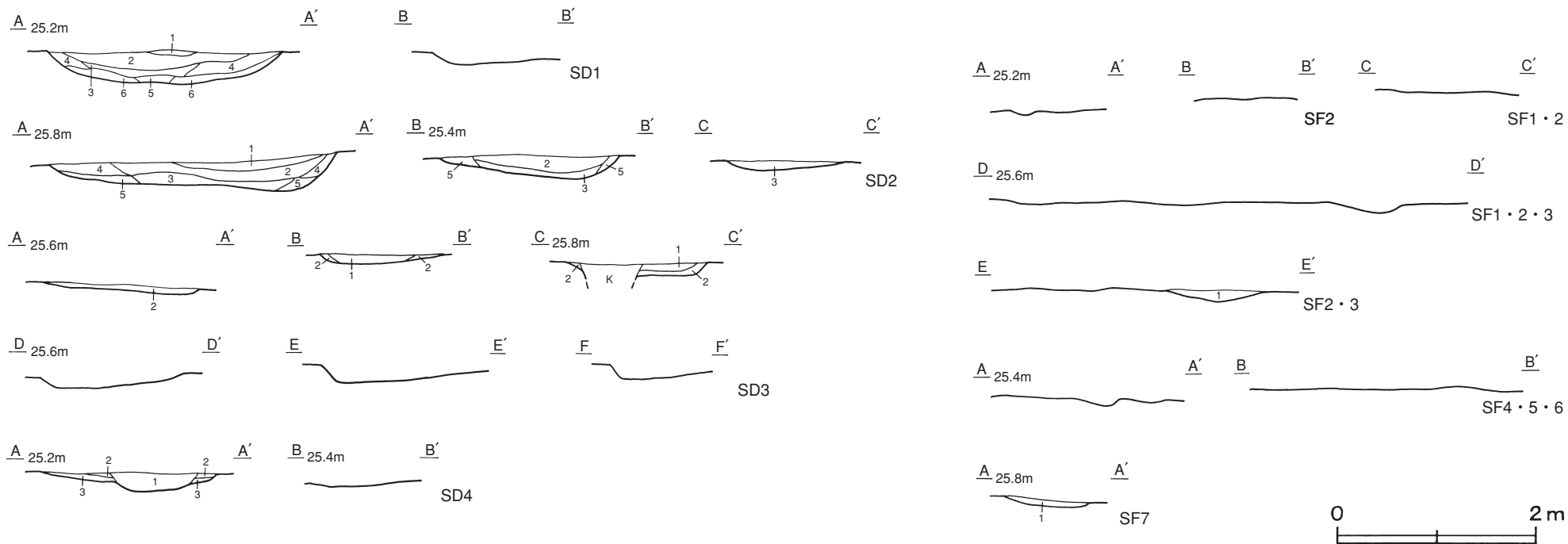
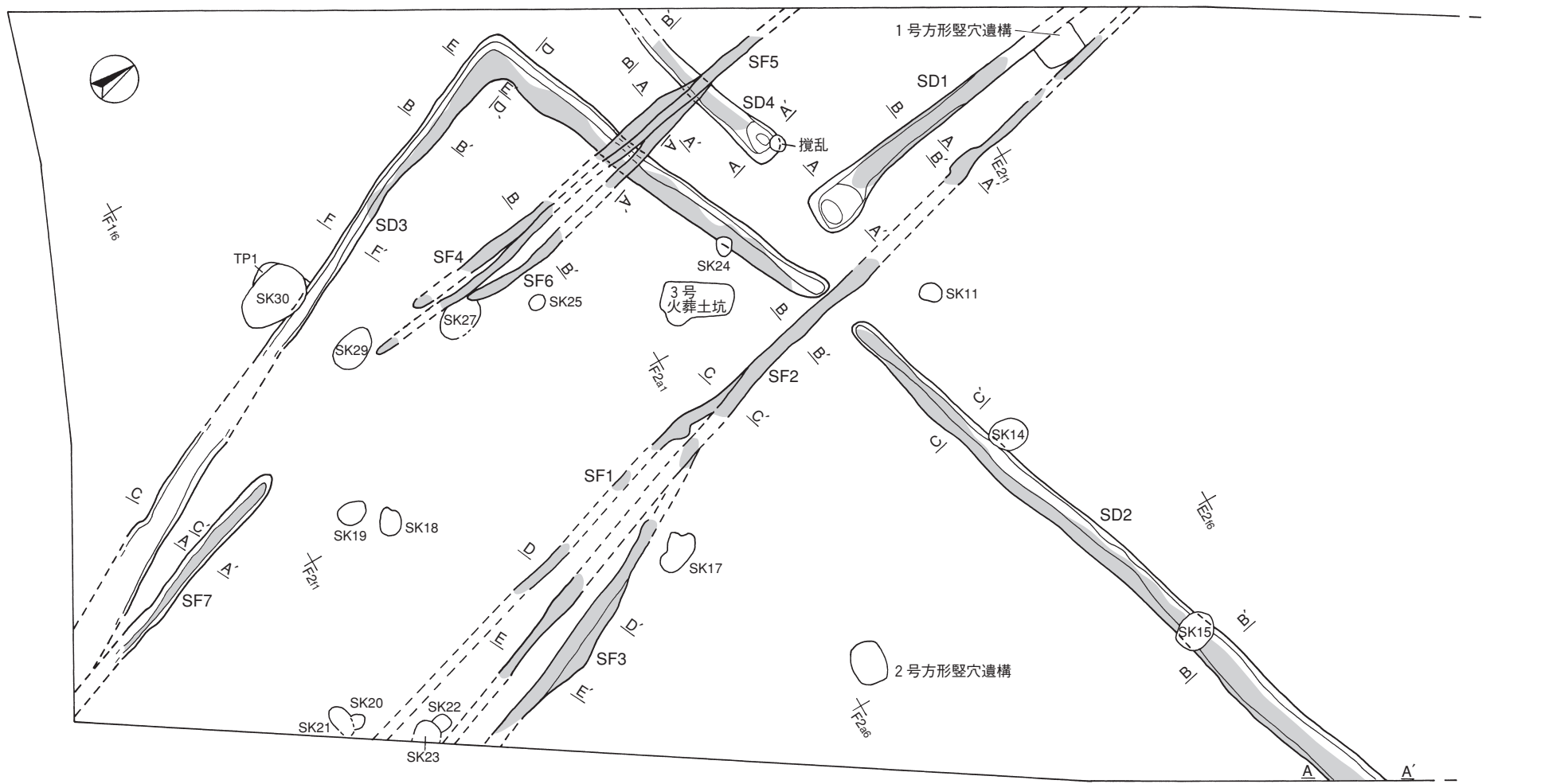
遺構番号	位置	主軸方向	形状	規模				断面	壁面	覆土	出土遺物	時期	備考 重複関係 (古→新)
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(m)						
1	C4g2～D2f4	N-60°-90°-E	直線～彎曲	(82.0)	6.6～8.2	0.9～1.5	3.2～3.7	逆台形	外傾	自然		16世紀	
2	B4h5～B3j4	N-70°-80°-E	ほぼ直線	(61.0)	3.0～4.3	0.4～1.1	1.2～1.8	逆台形	外傾	自然		16世紀	

(3) 溝跡

第1号溝跡（第10図）

位置 調査区南部のE1d9～E1h0区，標高25.0mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号方形竪穴遺構を掘り込んでいる。



第10図 第1～4号溝跡, 第1～7号道路跡実測図

規模と形状 北側が調査区域外に延びるため、確認できた長さは16.6mである。主軸方向はN-7°-Wで、ほぼ直線的に延びる。上幅1.0~2.3m、下幅0.7~1.7m、深さは14~34cmである。断面形は浅いU字状で、両壁は緩やかに立ち上がり、西側は傾斜角度がやや急である。底面が踏み固められているほか、土層断面中に硬化面が3面確認できる。南端部の幅は広く、深さも深い。また、南端部から幅2.7mの土橋状の地山を隔て、ほぼ垂直方向に第4号溝が掘り込まれている。

覆土 6層に分けられる。底面を含めて4面の硬化面が確認でき、第1面は第2層上面、第2面は第4層上面、第3面は第6層上面、第4面は本跡底面である。覆土は、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量	4 黒褐色	ロームブロック少量
2 黒色	ローム粒子微量	5 黒褐色	ロームブロック微量
3 黒色	ロームブロック微量	6 暗褐色	ロームブロック中量

所見 本跡は、第2~4号溝と合わせて一体となる区画溝で、土橋を挟んで第4号溝とともにL字形に区画していたものと思われる。また、硬化面が4面認められたことから、道路として機能していた時期もあると考えられる。さらに、本跡の北側に位置する第1~3号土塁、第1・2号堀跡と主軸方向がほぼ直行することから、これらの遺構群とも機能的に関連があり、時期的にもほぼ同時期中世後半の16世紀代と考えられる。

第2号溝跡 (第10図)

位置 調査区南部のE 2e0~E 2h1区、標高25.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第14・15号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東側が調査区域外に延びるため、確認できた長さは37.2mである。主軸方向はN-71°-Eで、ほぼ直線的に延びる。上幅1.0~1.8m、下幅0.5~1.2m、深さは8~38cmである。断面形は浅いU字状で、両壁は緩やかに立ち上がり、北側は傾斜角度がやや急である。底面が踏み固められているほか、土層断面中に硬化面が2面確認できる。また、西端部から幅2.1mの土橋状の地山を隔て、ほぼ同じ軸線上に第3号溝が掘り込まれている。

覆土 5層に分けられる。底面を含めて3面の硬化面が確認でき、第1面は第2層上面、第2面は第5層上面、第3面は本跡底面である。覆土は、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子微量	4 暗褐色	ロームブロック少量
2 黒色	ロームブロック微量	5 暗褐色	ロームブロック中量
3 黒褐色	ロームブロック少量		

所見 本跡は、第1・3・4号溝と合わせて一体となる区画溝で、土橋を挟んで第3号溝とともにL字形に区画していたものと思われる。また、硬化面が3面認められたことから、道路として機能していた時期もあると考えられる。さらに、本跡の北側に位置する第1~3号土塁、第1・2号堀跡と主軸方向がほぼ平行することから、これらの遺構群とも機能的に関連があり、時期的にもほぼ同時期中世後半の16世紀代と考えられる。

第3号溝跡 (第10図)

位置 調査区南部のE 2h1~F 1h0区、標高25.6mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号陥し穴を掘り込み、第24・30号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東西方向に走り、調査区北西壁付近でL字形に曲がり、南北方向へ走る。南側が調査区域外に延びるため、確認できた長さは東西溝が21.0m、南北溝が39.0mである。主軸方向は東西溝がN-68°-E、南北溝がN-24°-Wで、北西コーナー部を挟んでほぼ直線的に延びる。上幅0.8~1.6m、下幅0.3~1.1m、深さ

は10～20cmである。断面形は浅いU字状で、両壁は緩やかに立ち上がり、東西溝は北側、南北溝は西側が傾斜角度がやや急である。底面が踏み固められているほか、土層断面中に硬化面が1面確認できる。また、東西溝東端部から幅2.1mの土橋状の地山を隔て、ほぼ同じ軸線上に第2号溝が掘り込まれている。

覆土 2層に分けられる。底面を含めて2面の硬化面が確認でき、第1面は第2層上面、第2面は本跡底面である。覆土は、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 黒色 ロームブロック微量

2 黒褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 南北溝の覆土中から縄文土器片2点（深鉢）、不明鉄製品2点が出土している。

所見 本跡は、第1・2・4号溝と合わせて一体となる区画溝で、土橋を挟んで第2号溝とともにL字形に区画していたものと思われる。また、硬化面が2面認められたことから、道路として機能していた時期もあると考えられる。さらに、本跡の北側に位置する第1～3号土塁、第1・2号堀跡と主軸方向がほぼ平行・直行することから、これらの遺構群とも機能的に関連があり、時期的にもほぼ同時期中世後半の16世紀代と考えられる。

第4号溝跡（第10図）

位置 調査区南部のE1h9～E1i7区、標高25.2mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第4～6号道路に掘り込まれている。

規模と形状 西側が調査区域外に延びるため、確認できた長さは10.2mである。主軸方向はN-77°-Eで、ほぼ直線的に延びる。上幅0.9～1.6m、下幅0.5～1.2m、深さは6～20cmである。断面形は浅いU字状で、両壁は緩やかに立ち上がり、南側は傾斜角度がやや急である。底面が踏み固められているほか、土層断面中に硬化面が2面確認できる。東端部の幅は広く、深さも深い。また、東端部から2.7mの土橋状の地山を残し、ほぼ垂直方向に第1号溝が掘り込まれている。

覆土 3層に分けられる。底面を含めて3面の硬化面が確認できる。上から、第1面は第1層下面、第2面は第3層上面、第3面は本跡底面である。第1層は掘り直し時の覆土である。覆土は、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 黒色 ローム粒子微量

3 暗褐色 ロームブロック中量

2 黒褐色 ロームブロック少量

所見 本跡は、第1～3号溝と合わせて一体となる区画溝で、土橋を挟んで第1号溝とともにL字形に区画していたものと思われる。また、硬化面が3面認められたことから、道路として機能していた時期もあると考えられる。さらに、本跡の北側に位置する第1～3号土塁、第1・2号堀跡と主軸方向がほぼ平行することから、これらの遺構群とも機能的に関連があり、時期的にもほぼ同時期中世後半の16世紀代と考えられる。

第5号溝跡（第7・8図）

位置 調査区中央部のC4f4～D2b7区、標高23.5mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 A～Cトレンチの土層観察用の壁で確認したため、正確な規模は不明であるが、第2号土塁北端に沿って掘り込まれていることから、長さ72mで、主軸方向はN-60～90°-Eと推定される。Aトレンチで確認できた規模は、幅0.9m、旧地表面からの深さ50cm、第2号土塁からの深さ190cmである。Bトレンチで確認できた規模は、幅1.1m、旧地表面からの深さ50cm、第2号土塁からの深さ180cmである。Cトレンチで確認できた規模は、

幅0.6m, 旧地表面からの深さ30cm, 第2号土塁からの深さ200cmである。断面形は逆三角形で, 薬研状の溝である。

覆土 Aトレンチで第29～31層の3層, Bトレンチで第23～25層の3層, Cトレンチで第25～27層の3層にそれぞれ分けられる。上層は第2号土塁からの崩落土を主体としており, レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

所見 本跡は, 第2号土塁の北端に沿って掘り込まれた溝跡で, 第2号土塁と合わせて一体となる遺構である。本跡に伴う遺物は出土していないが, 時期は他の遺構・遺物から中世後半の16世紀代と考えられる。

第6号溝跡 (第7～9図)

位置 調査区北部のB4h8～C3a4区, 標高23.0mの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 C～Fトレンチの土層観察用の壁で確認したため, 正確な規模は不明であるが, 第3号土塁南端に沿って掘り込まれていることから, 長さ61mで, 主軸方向はN-70～80°-Eと推定される。Cトレンチで確認できた規模は, 幅0.9m, 旧地表面からの深さ50cm, 第3号土塁からの深さ100cmである。Dトレンチで確認できた規模は, 幅0.6m, 旧地表面からの深さ30cm, 第3号土塁からの深さ120cmである。Eトレンチで確認できた規模は, 幅1.1m, 旧地表面からの深さ40cm, 第3号土塁からの深さ120cmである。Fトレンチで確認できた規模は, 幅1.2m, 旧地表面からの深さ80cm, 第3号土塁からの深さ210cmである。断面形は逆三角形で, 薬研状の溝である。

覆土 Cトレンチで第28～30層の3層, Dトレンチで第14・15層の2層, Eトレンチで第10・11層の2層, Fトレンチで第9・10層の2層にそれぞれ分けられる。上層は第3号土塁からの崩落土を主体としており, レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

所見 本跡は, 第3号土塁の南端に沿って掘り込まれた溝跡で, 第3号土塁と合わせて一体となる遺構である。本跡に伴う遺物は出土していないが, 時期は他の遺構・遺物から中世後半の16世紀代と考えられる。

第7号溝跡 (第7・8図)

位置 調査区北部のC3c7～C3d7区, 標高22.5mの谷津部に位置している。

規模と形状 Cトレンチの土層観察用の壁で確認したため, 正確な規模は不明である。確認できた規模は, 上幅6.6m, 下幅0.6m, 旧地表面からの深さ70cmである。断面形は逆台形で, 緩やかに立ち上がっている。

覆土 Cトレンチで第44～46層の3層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

所見 本跡は, 第2号土塁と第3号土塁の間の自然の谷津に掘り込まれた溝跡である。土塁間のほぼ中央に位置していることから, これらの遺構群とも機能的に関連があり, 時期的にもほぼ同時期中世後半の16世紀代と考えられる。

表4 溝跡一覧表

遺構番号	位置	主軸方向	形状	規模				断面	壁面	覆土	出土遺物	時期	備考 重複関係 (古→新)
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)						
1	E1d9～E1h0	N-7°-W	ほぼ直線	(16.6)	1.0～2.3	0.7～1.7	14～34	浅いU字状	緩斜	自然		16世紀	1号方形竪穴遺構→本跡
2	E2e0～E2h1	N-71°-E	ほぼ直線	(37.2)	1.0～1.8	0.5～1.2	8～38	浅いU字状	緩斜	自然		16世紀	本跡→SK14・15
3	E2h1～F1h0	N-68°-E N-24°-W	L字形	21.0 (39.0)	0.8～1.6	0.3～1.1	10～20	浅いU字状	緩斜	自然	縄文土器・ 不明鉄製品	16世紀	TP1→本跡→ SK24・30
4	E1h9～E1i7	N-77°-E	ほぼ直線	(10.2)	0.9～1.6	0.5～1.2	6～20	浅いU字状	緩斜	自然		16世紀	本跡→SF4～6
5	C4f4～D2b7	N-60～90°-E	[直線～彎曲]	(72.0)	0.6～1.1	—	30～50	逆三角形	外傾	自然		16世紀	
6	B4h8～C3a4	N-70～80°-E	[ほぼ直線]	(61.0)	0.6～1.2	—	30～80	逆三角形	外傾	自然		16世紀	
7	C3c7～C3d7	—	—	—	6.6	0.6	70	逆台形	緩斜	自然		16世紀	

(4) 平場遺跡

第1号平場遺構 (第7～9図)

位置 調査区北部のB3区, 標高24.5～25.0mの台地緩斜面部に位置している。

調査 C～Eトレンチを設定した。

規模と形状 北西側が調査区域外に延びるため, 確認できた規模は東西約23m, 南北約15m, 面積は約175㎡である。北東部は0.2～0.3m切り土され, 南部は第2号堀に沿って0.4～0.5m盛り土されている。Cトレンチで確認できた盛り土の規模は, 幅1.0m, 旧地表面からの高さ0.4mである。Dトレンチで確認できた盛り土の規模は, 幅4.3m, 旧地表面からの高さ0.5mである。Eトレンチで確認できた盛り土の規模は, 幅5.7m, 旧地表面からの高さ0.5mである。

構築状況 確認できた本跡の盛り土整地の構築土は, Cトレンチで第47～49層の3層, Dトレンチで第16～19層の4層, Eトレンチで第12・13層の2層である。一部に粘土を含んだ締まりの強い土層も見られるが, 全体的に締まりの弱い土層が多く, 叩き締めや突き固めはあまり認められない。

所見 本跡は, 第2号堀の北側に構築された遺構である。南側に位置する第2号堀, 第3号土塁, さらに自然の谷津を挟んで南側に位置する第2号土塁, 第1号堀, 及び第1号土塁と合わせて一体となる遺構群の一つである。構築方法は, 標高の高い北東部を段切状に切り土し, 標高の低い南部を盛り土して, 高低差を少なくするように整地し, 平場を造り出している。また, 第2号堀や北東部の切り土整地の掘削土を, 基本的には叩き締めや突き固めをせずに, 掻き上げ, 盛り上げて築いており, 一過性の平場と思われる。本跡に伴う遺物は出土していないが, 時期は他の遺構・遺物から中世後半の16世紀代と考えられる。

第2号平場遺構 (第7・9図)

位置 調査区北部のB3～B4区, 標高25.5～26.0mの台地緩斜面部に位置している。

調査 Fトレンチを設定した。

規模と形状 北東部及び北西側が調査区域外に延びるため, 確認できた規模は東西約36m, 南北約35m, 面積は約625㎡である。南部は第2号堀に沿って盛り土されている。Fトレンチで確認できた盛り土の規模は, 幅4.8m, 旧地表面からの高さ0.2mである。

構築状況 確認できた本跡の盛り土整地の構築土は, Fトレンチで第11・12層の2層である。2層とも締まりの弱い土層で, 叩き締めや突き固めはあまり認められない。

所見 本跡は, 第2号堀の北側に構築された遺構である。南側に位置する第2号堀, 第3号土塁, さらに自然の谷津を挟んで南側に位置する第2号土塁, 第1号堀, 及び第1号土塁と合わせて一体となる遺構群の一つである。構築方法は, 標高の低い南部を盛り土して, 高低差を少なくするように整地し, 平場を造り出している。また, 第2号堀の掘削土を, 基本的には叩き締めや突き固めをせずに, 掻き上げ, 盛り上げて築いており, 一過性の平場と思われる。本跡に伴う遺物は出土していないが, 時期は他の遺構・遺物から中世後半の16世紀代と考えられる。

表5 平場遺構一覧表

遺構番号	位置	主軸方向	形状	規模						盛土	出土遺物	時期	備考 重複関係 (古→新)
				東西長(m)	南北長(m)	面積(㎡)	切り土高さ(m)	盛り土幅(m)	盛り土高さ(m)				
1	B3	—	—	(23.0)	(15.0)	(175)	0.2～0.3	1.0～5.7	0.4～0.5	人為		16世紀	
2	B3～B4	—	—	(36.0)	(35.0)	(625)	—	4.8	0.2	人為		16世紀	

(5) 方形竪穴遺構

第1号方形竪穴遺構 (第11図)

位置 調査区南部のE1d0区, 標高24.7mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号溝・第2号道路に掘り込まれている。

規模と形状 北西部が調査区域外に延びるため, 確認できた規模は長軸2.24m, 短軸2.1mで, 主軸方向はN-4°-Wの方形と推定される。壁高は16~32cmで, 外傾している。

床 確認できた部分はやや凹凸があり, 硬化面は認められない。

ピット 4か所。深さ16~22cmで, 性格は不明である。

覆土 5層に分けられる。ロームブロックを含み, 不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量 | 5 褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 褐色 | ロームブロック多量 | | |

所見 本跡は, 他の類似遺構との比較から方形竪穴遺構と思われる。本跡に伴う遺物は出土していないが, 時期は覆土などから中世後半と考えられる。

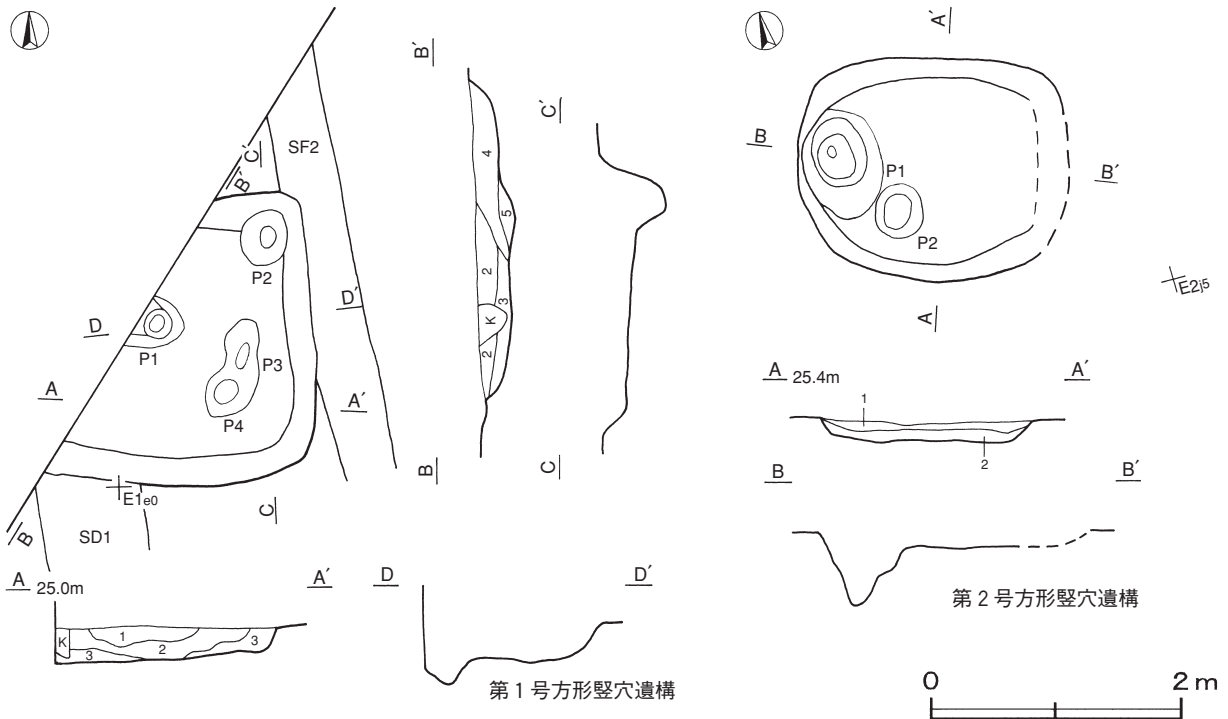
第2号方形竪穴遺構 (第11図)

位置 調査区南部のE2j5区, 標高25.1mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 東壁が木根の攪乱を受けているが, 長軸2.1m, 短軸1.76mで, 主軸方向はN-75°-Wの隅丸長方形と推定される。壁高は14~16cmで, 外傾している。

床 ほぼ平坦で, 硬化面は認められない。

ピット 2か所。深さ22~44cmで, 性格は不明である。



第11図 第1・2号方形竪穴遺構実測図

覆土 2層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量 2 暗 褐 色 ロームブロック中量

所見 本跡は、他の類似遺構との比較から方形堅穴遺構と思われる。本跡に伴う遺物は出土していないが、時期は覆土などから中世後半と考えられる。

表6 方形堅穴遺構一覧表

遺構 番号	位置	主軸方向	平面形	規模		底面	内部施設		覆土	出土遺物	時期	備考 重複関係 (古→新)
				長軸×短軸(m)	壁高(cm)		支柱穴	ピット				
1	E 1d0	N - 4° - W	[方形]	2.24 × (2.1)	16~32	凹凸	—	4	人為		中世後半	本跡→SD 1・SF2
2	E 2j5	N - 75° - W	隅丸長方形	[2.1] × 1.76	14~16	平坦	—	2	自然		中世後半	

(6) 火葬土坑

第1号火葬土坑 (第12図)

位置 調査区南部のD 3g3区, 標高25.2mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 主軸方向N - 38° - EのT字形を呈している。燃焼部は長軸3.22m, 短軸1.20mの長方形である。深さは10~14cmで、底面は北西側にやや傾斜している。通気溝は長さ0.66m, 上幅0.42m, 下幅0.30mで、深さは4cmである。燃焼部の底面及び壁面の赤変硬化はあまり認められない。

覆土 5層に分けられる。焼土や炭化物を含み、不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 黒 色 炭化物多量, 焼土粒子少量, ロームブロック微量 4 褐 色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
 2 暗 褐 色 炭化物中量, ロームブロック少量, 焼土粒子微量 5 褐 色 ロームブロック多量
 3 暗 褐 色 炭化物多量, ロームブロック少量, 焼土粒子微量

所見 本跡は、火葬骨片を確認できなかったが、他の類似遺構との比較から火葬土坑と思われる。本跡に伴う遺物は出土していないが、時期は覆土などから中世後半と考えられる。

第2号火葬土坑 (第12図)

位置 調査区南部のE 2a5区, 標高24.7mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 燃焼部だけ確認された。長軸1.78m, 短軸1.34mの長方形で、長軸方向はN - 22° - Wである。深さは26~28cmで、底面は平坦である。底面及び壁面は赤変硬化している。

覆土 6層に分けられる。焼土や炭化物を含み、不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

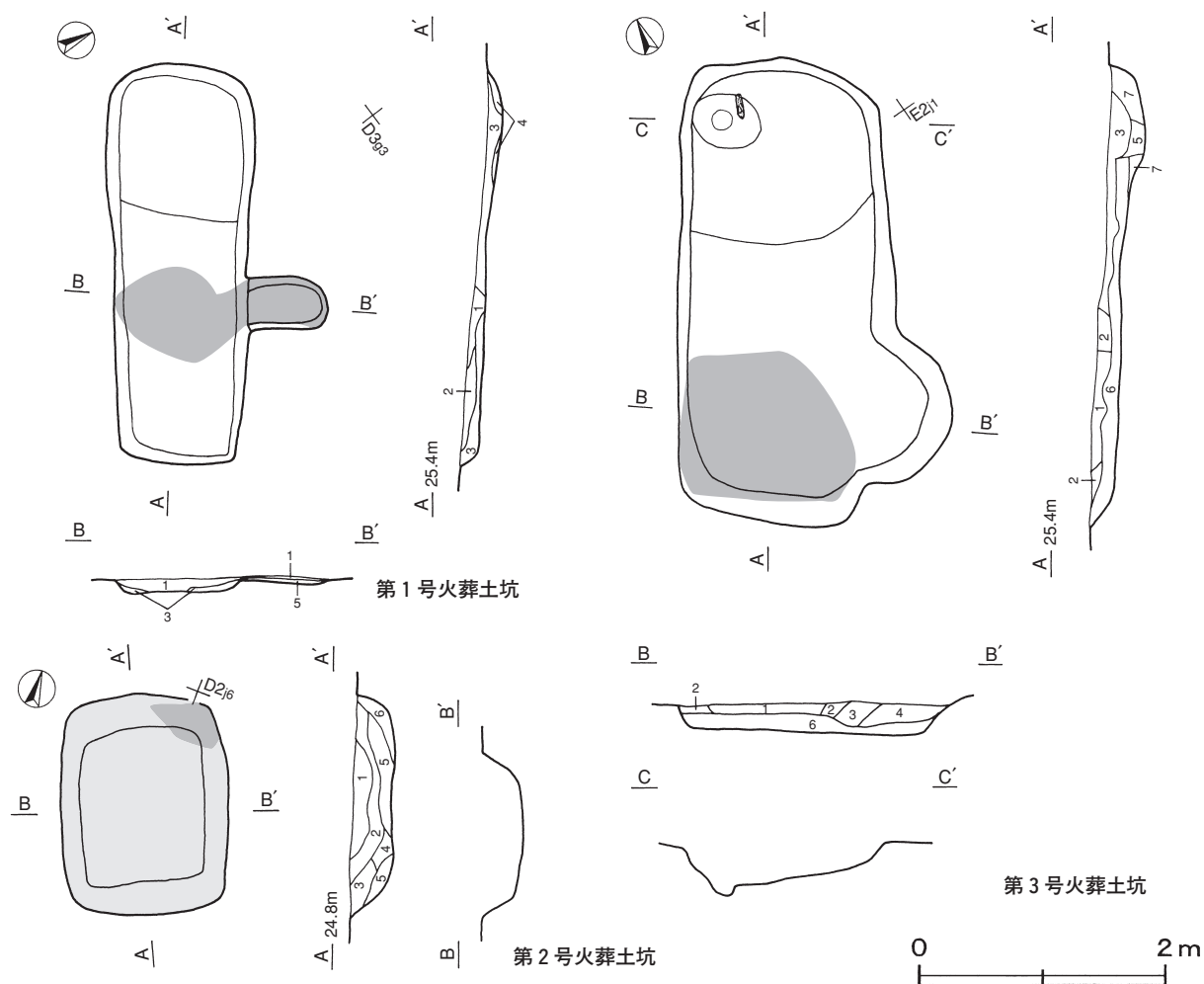
土層解説

- 1 黒 褐 色 炭化物中量, ローム粒子少量, 焼土粒子微量 4 黒 褐 色 ロームブロック・炭化物少量, 焼土粒子微量
 2 黒 褐 色 ロームブロック中量, 炭化物・焼土粒子少量 5 黒 色 炭化物多量, 焼土粒子中量, ロームブロック少量
 3 暗 褐 色 ロームブロック・焼土粒子中量, 炭化物少量 6 褐 色 ロームブロック多量, 焼土粒子中量, 炭化物少量

所見 本跡は、火葬骨片を確認できなかったが、他の類似遺構との比較から火葬土坑と思われる。本跡に伴う遺物は出土していないが、時期は覆土などから中世後半と考えられる。

第3号火葬土坑 (第12図)

位置 調査区南部のE 1j0区, 標高25.1mの台地平坦部に位置している。



第12図 第1～3号火葬土坑実測図

規模と形状 主軸方向N-56°-WのT字形を呈している。燃焼部は長軸3.74m、短軸1.74mの長方形である。深さは18～24cmで、底面は北東側にやや傾斜しており、北コーナー部に深さ8cmのピットをもつ。通気溝は長さ0.66m、上幅1.20m、下幅0.80mで、深さは26cmである。燃焼部の底面及び壁面の赤変硬化はあまり認められない。

覆土 7層に分けられる。焼土や炭化物を含み、不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|-------|------------------|
| 1 黒色 | 炭化物多量、ロームブロック微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒色 | 炭化物多量、ロームブロック少量 | 6 褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・炭化物中量、焼土粒子微量 | 7 褐色 | ロームブロック多量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | | |

所見 本跡は、火葬骨片を確認できなかったが、他の類似遺構との比較から火葬土坑と思われる。本跡に伴う遺物は出土していないが、時期は覆土などから中世後半と考えられる。

表7 火葬土坑一覧表

遺構番号	位置	主軸方向	平面形	規模										覆土	人骨出土遺物	時期	備考 重複関係 (古→新)
				燃焼部				通気溝									
				長軸×短軸(m)	深さ(cm)	平面形	底面	長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)						
1	D 3g3	N-38°-E	T字形	3.22×1.20	10～14	長方形	傾斜	0.66	0.42	0.30	4	人為		中世後半			
2	E 2a5	[N-22°-W]	-	1.78×1.34	26～28	長方形	平坦	-	-	-	-	人為		中世後半			
3	E 1j0	N-56°-W	T字形	3.74×1.74	18～24	長方形	傾斜	0.66	1.20	0.80	26	人為		中世後半			

(7) 土坑

第1号土坑 (第13図)

位置 調査区南部のD 3g4区, 標高25.4mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸1.20m, 短軸0.76mの隅丸長方形で, 長軸方向はN-22°-Wである。深さは12cmで, 底面はほぼ平坦であり, 壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土 4層に分けられる。炭化物を含み, 不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1 黒褐色	炭化物少量, ロームブロック微量	3 褐色	ロームブロック中量
2 暗褐色	ロームブロック・炭化物少量	4 褐色	ロームブロック多量

所見 本跡は, 覆土の含有物から火葬土坑の可能性も考えられるが, 詳細は不明である。本跡に伴う遺物は出土していないが, 時期は覆土などから中世後半と考えられる。

第2号土坑 (第13図)

位置 調査区南部のD 3h4区, 標高25.6mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸1.02m, 短軸0.66mの隅丸長方形で, 長軸方向はN-38°-Wである。深さは14cmで, 底面に深さ46cmのピットを有し, 壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土 3層に分けられる。炭化物を含み, 不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・炭化物少量	3 褐色	ロームブロック多量
2 褐色	ロームブロック中量		

所見 本跡は, 覆土の含有物から火葬土坑の可能性も考えられるが, 詳細は不明である。本跡に伴う遺物は出土していないが, 時期は覆土などから中世後半と考えられる。

第4号土坑 (第13図)

位置 調査区南部のE 3a2区, 標高25.8mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南東部が調査区域外に延びるため, 確認できた規模は長径1.72m, 短径1.6mで, 長径方向はN-21°-Eの楕円形と推定される。深さは46cmで, 底面に深さ18cmのピットを有し, 壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土 5層に分けられる。焼土や炭化物を含み, 不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	4 褐色	ロームブロック中量
2 暗褐色	ロームブロック少量, 炭化物・焼土粒子微量	5 褐色	ロームブロック多量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量, 炭化粒子微量		

所見 本跡は, 覆土の含有物から火葬土坑の可能性も考えられるが, 詳細は不明である。本跡に伴う遺物は出土していないが, 時期は覆土などから中世後半と考えられる。

第5号土坑 (第13図)

位置 調査区南部のE 3a1区, 標高25.6mの台地平坦部に位置している。

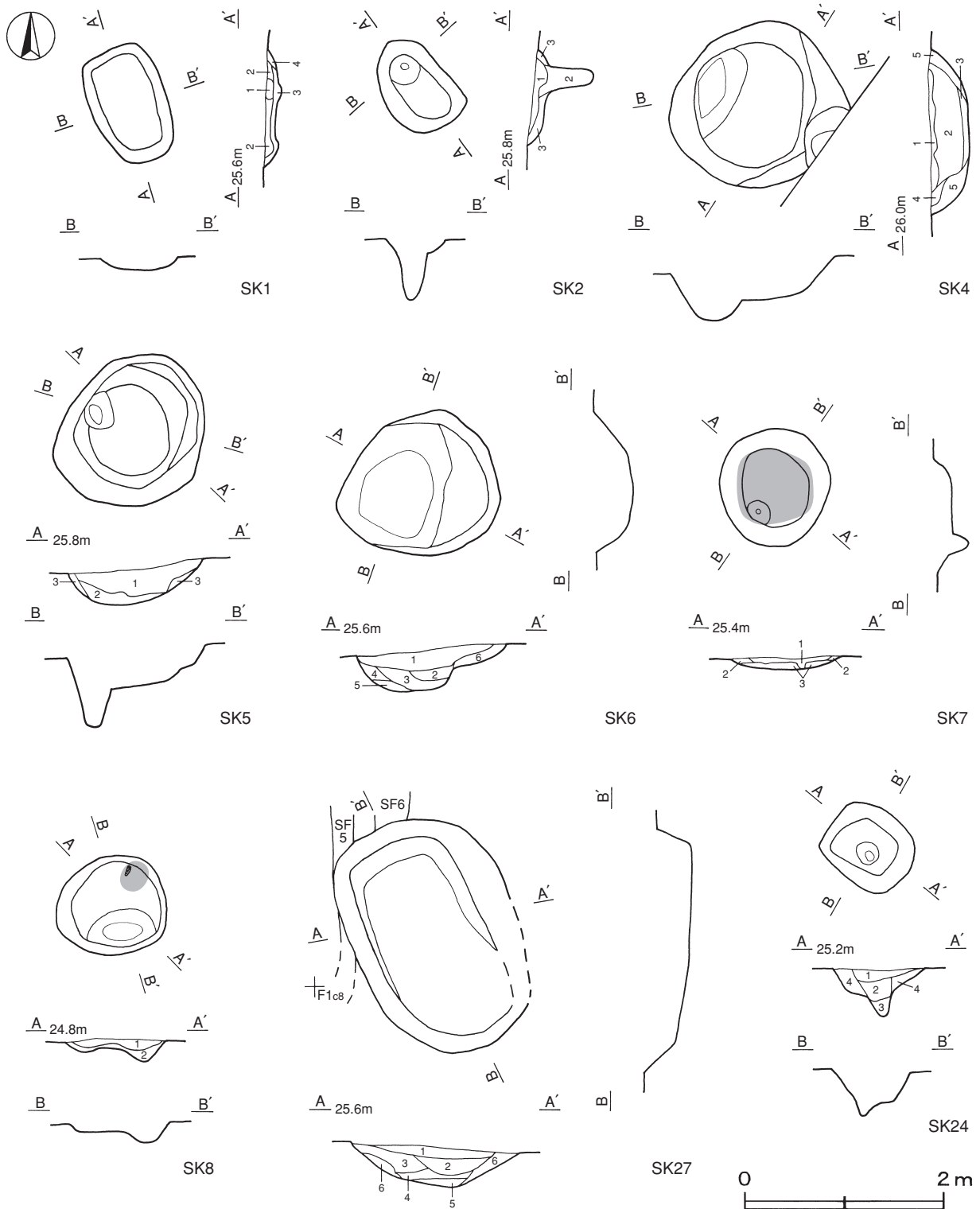
規模と形状 長径1.64m, 短径1.40mの楕円形で, 長径方向はN-34°-Eである。深さは44cmで, 底面に深さ38cmのピットを有し, 壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土 3層に分けられる。焼土や炭化物を含み、不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化物中量, 焼土粒子微量
- 2 黒褐色 炭化物多量, ロームブロック・焼土粒子少量
- 3 褐色 ロームブロック多量

所見 本跡は、覆土の含有物から火葬土坑の可能性も考えられるが、詳細は不明である。本跡に伴う遺物は出土していないが、時期は覆土などから中世後半と考えられる。



第13図 中世土坑実測図

第6号土坑（第13図）

位置 調査区南部のE 2b0区、標高25.4mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.62m、短径1.44mの楕円形で、長径方向はN-89°-Wである。深さは42cmで、底面に段を有し、壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土 6層に分けられる。焼土や炭化物を含み、不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック中量、炭化物少量、焼土粒子微量	4 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量	5 黒褐色	炭化物多量、ロームブロック・焼土粒子少量
3 暗褐色	ロームブロック・炭化物中量、焼土粒子微量	6 褐色	ロームブロック多量、焼土粒子微量

所見 本跡は、覆土の含有物から火葬土坑の可能性も考えられるが、詳細は不明である。本跡に伴う遺物は出土していないが、時期は覆土などから中世後半と考えられる。

第7号土坑（第13図）

位置 調査区南部のE 2d8区、標高25.2mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.18m、短径1.08mの円形で、長径方向はN-27°-Eである。深さは20cmで、底面に深さ16cmのピットを有し、壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土 3層に分けられる。焼土や炭化物を含み、不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1 黒色	炭化物中量、ロームブロック少量、焼土粒子微量	3 褐色	ロームブロック多量
2 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量		

所見 本跡は、覆土の含有物から火葬土坑の可能性も考えられるが、詳細は不明である。本跡に伴う遺物は出土していないが、時期は覆土などから中世後半と考えられる。

第8号土坑（第13図）

位置 調査区南部のE 2a6区、標高25.7mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.12m、短径1.00mの楕円形で、長径方向はN-74°-Eである。深さは12cmで、底面に深さ10cmのピットを有し、壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土 2層に分けられる。焼土や炭化物を含み、不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・炭化物中量、焼土粒子微量	2 褐色	ロームブロック多量
-------	----------------------	------	-----------

遺物出土状況 覆土中から陶器片1点（皿）が出土している。

所見 本跡は、覆土の含有物から火葬土坑の可能性も考えられるが、詳細は不明である。時期は出土遺物や覆土から16世紀と考えられる。

第24号土坑（第13図）

位置 調査区南部のE 1io区、標高25.0mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸0.90m、短軸0.76mの隅丸長方形で、長軸方向はN-55°-Wである。深さは36cmで、底面に深さ10cmのピットを有し、壁面は外傾している。

覆土 4層に分けられる。柱の抜き取り痕に似た堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック微量
2 暗褐色 ロームブロック少量
3 褐色 ロームブロック中量
4 褐色 ロームブロック多量

所見 本跡は、柱穴状の土坑であるが、建物や塀のように他に並ぶものは確認できなかった。本跡に伴う遺物は出土していないが、時期は覆土などから中世後半と考えられる。

第27号土坑 (第13図)

位置 調査区南部のF1b9区、標高25.3mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第5・6号道路に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.44m、短軸1.66mの隅丸長方形で、長軸方向はN-24°-Wである。深さは42cmで、底面は南東側にやや傾斜しており、壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土 6層に分けられる。焼土や炭化物を含み、不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量
2 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量
3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 黒褐色 炭化物中量、ロームブロック・焼土粒子少量
5 褐色 ロームブロック多量、炭化粒子少量
6 褐色 ロームブロック多量

所見 本跡は、覆土の含有物から火葬土坑の可能性も考えられるが、詳細は不明である。本跡に伴う遺物は出土していないが、時期は覆土などから中世後半と考えられる。

表8 中世土坑一覧表

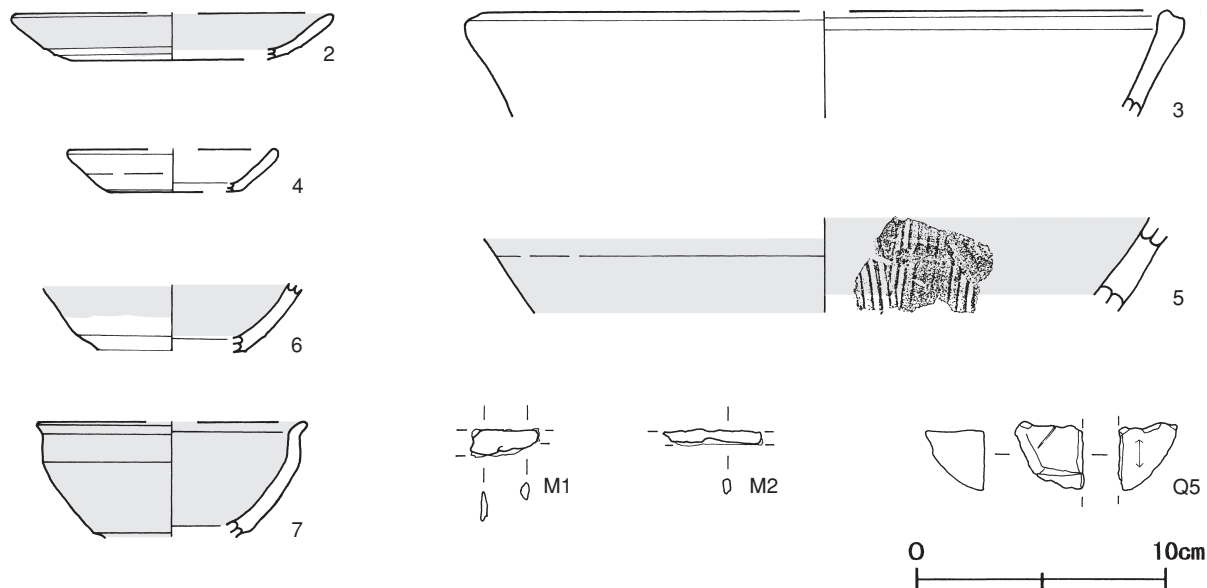
遺構番号	位置	長軸方向 長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	出土遺物	時期	備考 重複関係 (古→新)
				長軸・長径×短軸・短径(m)	深さ(cm)						
1	D3g4	N-22°-W	隅丸長方形	1.20 × 0.76	12	平坦	緩斜	人為		中世後半	
2	D3h4	N-38°-W	隅丸長方形	1.02 × 0.66	14(60)	ピット	緩斜	人為		中世後半	
4	E3a2	[N-21°-E]	[楕円形]	1.72 × (1.6)	46(64)	ピット	緩斜	人為		中世後半	
5	E3a1	N-34°-E	楕円形	1.64 × 1.40	44(82)	ピット	緩斜	人為		中世後半	
6	E2b0	N-89°-W	楕円形	1.62 × 1.44	42	二段	緩斜	人為		中世後半	
7	E2d8	N-27°-E	円形	1.18 × 1.08	20(36)	ピット	緩斜	人為		中世後半	
8	E2a6	N-74°-E	楕円形	1.12 × 1.00	12(22)	ピット	緩斜	人為	陶器	16世紀	
24	E1i0	N-55°-W	隅丸長方形	0.90 × 0.76	36(46)	ピット	外傾	人為		中世後半	SD3→本跡
27	F1b9	N-24°-W	隅丸長方形	2.44 × 1.66	42	傾斜	緩斜	人為		中世後半	本跡→SF5・6

(8) 遺構外出土遺物 (第14図)

今回の調査で、表土層から遺構に伴わない中世の遺物が出土している。ここでは、土師質土器・陶器など特徴的な遺物について、実測図及び遺物観察表で掲載する。

第3号溝跡出土遺物観察表 (第14図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	不明鉄製品	(2.9)	1.2	0.2~3	(1.5)	鉄	刀子の茎部カ	南北溝覆土中	PL5
M2	不明鉄製品	(4.0)	0.7	0.3	(1.6)	鉄	刀子の茎部カ	南北溝覆土中	PL5



第14図 中世出土遺物実測図

第8号土坑出土遺物観察表（第14図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2	陶器	皿	[12.6]	1.8	[8.0]	緻密	釉浅黄 胎土浅黄	良好	ロクロ成形 体部下端回転ヘラ 削り内・外面鉄釉を施釉 底 部露胎 削り出し高台が付く 可能性あり	覆土中	10% PL6 16世紀後半 瀬戸・美濃系

中世遺構外出土遺物観察表（第14図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3	土師質 土器	内耳鍋	[27.4]	(4.2)	-	長石・金雲母・ 海綿骨針・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	粘土紐巻上げ成形 口唇部凹む 口縁部内面横ナデ 外面煤付着	D 2区表土	5% PL6 16世紀後半
4	土師質 土器	小皿	[8.2]	1.7	[5.0]	長石・金雲母	にぶい黄橙	普通	ロクロ成形 口縁部及び体部内・ 外面ロクロナデ	E 2区表土	10% PL6 16世紀後半
5	陶器	播鉢	-	(3.7)	-	緻密	釉暗赤褐 胎土淡黄	良好	ロクロ成形 体部下端回転ヘラ 削り内面5条以上1単位の播 目内・外面鉄釉を施釉	C 3区表土	5% PL6 16世紀後半 瀬戸・美濃系
6	陶器	天目茶碗	-	(2.6)	-	緻密	釉黒褐 胎土にぶい黄橙	良好	ロクロ成形 体部下端回転ヘラ 削り内・外面鉄釉を施釉 底 部露胎	E 2区表土	5% PL6 16世紀後半 瀬戸・美濃系
7	陶器	天目茶碗	[10.6]	(4.6)	-	緻密	釉黒褐 胎土灰白	良好	ロクロ成形 口縁部くびれる 内・外面鉄釉を施釉 底部露胎	表採	10% PL6 16世紀後半 瀬戸・美濃系

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 5	砥石	(2.8)	(2.7)	(2.4)	(15.1)	凝灰岩	砥面2面遺存 うち1面に溝状の研磨痕あり	F 1区表土	PL5

3 その他の遺構と遺物

近世以降及び時期不明の遺構は、道路跡7条、土坑13基が確認されている。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 道路跡

第1号道路跡（第10図）

位置 調査区南部のE 2 j 1～F 2 f 3区、標高25.5mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南側が調査区域外に延びるため、確認できた長さは27.0mである。主軸方向はN-16°-Wで、ほぼ

直線的に延び、北端で第2号道路と合流する。掘り込みが浅いため、削平されて部分的に確認できなかったところもあるが、幅0.5～0.6m、深さは最深が4cmで、底面が踏み固められている。断面形は極めて浅いU字状である。

覆土 黒褐色でロームブロックを少量含み、自然堆積と思われる。

所見 本跡は、第2・3号道路と合流して一体となる道路跡で、時期は近世以降と思われる。

第2号道路跡（第10図）

位置 調査区南部のE1d0～F2e3区、標高25.5mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北側及び南側が調査区域外に延びるため、確認できた長さは50.0mである。主軸方向はN-20°-Wで、ほぼ直線的に延び、中央付近で第1・3号道路と合流する。掘り込みが浅いため、削平されて部分的に確認できなかったところもあるが、幅0.4～0.8m、深さは最深が4cmで、底面が踏み固められている。断面形は極めて浅いU字状である。また、第2・3号溝跡とは土橋部で交差し、さらに北に延びている。

覆土 黒褐色でロームブロックを少量含み、自然堆積と思われる。

所見 本跡は、第1・3号道路と合流して一体となる道路跡で、第2・3号溝跡間の土橋を意識している。時期は第2・3号溝跡よりは新しく、近世以降と思われる。

第3号道路跡（第10図）

位置 調査区南部のF2a2～F2e4区、標高25.5mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南側が調査区域外に延びるため、確認できた長さは18.0mである。主軸方向はN-24°-Wで、ほぼ直線的に延び、北端で第2号道路と合流する。掘り込みが浅いため、削平されて部分的に確認できなかったところもあるが、幅0.5～1.2m、深さは最深が10cmで、底面が踏み固められている。断面形は極めて浅いU字状である。

覆土 黒褐色でロームブロックを少量含み、自然堆積と思われる。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量

所見 本跡は、第1・2号道路と合流して一体となる道路跡で、時期は近世以降と思われる。

第4号道路跡（第10図）

位置 調査区南部のE1h8～F1c8区、標高25.3mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3・4号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 確認できた長さは19.0mである。主軸方向はN-8°-Wで、ほぼ直線的に延び、北端で第5号道路と合流する。掘り込みが浅いため、削平されて部分的に確認できなかったところもあるが、幅0.5～0.8m、深さは最深が4cmで、底面が踏み固められている。断面形は極めて浅いU字状である。

覆土 黒褐色でロームブロックを少量含み、自然堆積と思われる。

所見 本跡は、第5・6号道路と合流して一体となる道路跡で、時期は近世以降と思われる。

第5号道路跡（第10図）

位置 調査区南部のE1g8～F1c9区、標高25.3mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3・4号溝跡、第27号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 南側が調査区域外に延びるため、確認できた長さは27.0mである。主軸方向はN-10°-Wで、ほぼ直線的に延び、第4号溝跡付近で第4・6号道路と合流する。掘り込みが浅いため、削平されて部分的に確認できなかったところもあるが、幅0.4~0.6m、深さは最深が6cmで、底面が踏み固められている。断面形は極めて浅いU字状である。

覆土 黒褐色でロームブロックを少量含み、自然堆積と思われる。

所見 本跡は、第4・6号道路と合流して一体となる道路跡で、時期は近世以降と思われる。また、本跡の南端部から8m隔ててほぼ同じ軸線上に掘り込まれている第7号道路跡に続いていた可能性も考えられる。

第6号道路跡（第10図）

位置 調査区南部のE1h8~F1b9区、標高25.3mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3・4号溝跡、第27号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 確認できた長さは17.0mである。主軸方向はN-16°-Wで、ほぼ直線的に延び、北端で第5号道路と合流する。掘り込みが浅いため、削平されて部分的に確認できなかったところもあるが、幅0.4~0.6m、深さは最深が4cmで、底面が踏み固められている。断面形は極めて浅いU字状である。

覆土 黒褐色でロームブロックを少量含み、自然堆積と思われる。

所見 本跡は、第4・5号道路と合流して一体となる道路跡で、時期は近世以降と思われる。

第7号道路跡（第10図）

位置 調査区南部のF1e9~F2i1区、標高25.7mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南側が調査区域外に延びるため、確認できた長さは15.0mである。主軸方向はN-20°-Wで、ほぼ直線的に延びる。上幅0.8~1.0m、下幅0.3~0.6m、深さは6~10cmで、底面が踏み固められている。断面形は浅いU字状で、両壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 遺存する覆土は1層で、黒褐色でロームブロックを少量含み、自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量

所見 本跡の時期は近世以降と思われる。また、本跡の北端部から8m隔ててほぼ同じ軸線上に掘り込まれている第5号道路跡に続いていた可能性も考えられる。

表9 道路跡一覧表

遺構番号	位置	主軸方向	形状	規模				断面	壁面	覆土	出土遺物	時期	備考 重複関係 (古→新)
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)						
1	E2j1~F2f3	N-16°-W	ほぼ直線	(27.0)	0.5~0.6	—	0~4	[浅いU字状]	—	自然		近世以降	
2	E1d0~F2e3	N-20°-W	ほぼ直線	(50.0)	0.4~0.8	—	0~4	[浅いU字状]	—	自然		近世以降	
3	F2a2~F2e4	N-24°-W	ほぼ直線	(18.0)	0.5~1.2	—	0~10	浅いU字状	—	自然		近世以降	
4	E1h8~F1c8	N-8°-W	ほぼ直線	(19.0)	0.5~0.8	—	0~4	[浅いU字状]	—	自然		近世以降	SD3・4→本跡
5	E1g8~F1c9	N-10°-W	ほぼ直線	(27.0)	0.4~0.6	—	0~6	[浅いU字状]	—	自然		近世以降	SD3・4, SK27→ 本跡
6	E1h8~F1b9	N-16°-W	ほぼ直線	(17.0)	0.4~0.6	—	0~4	[浅いU字状]	—	自然		近世以降	SD3・4, SK27→ 本跡
7	F1e9~F2i1	N-20°-W	ほぼ直線	(15.0)	0.8~1.0	0.3~0.6	6~10	浅いU字状	緩斜	自然		近世以降	

(2) 土坑 (第15・16図)

今回の調査では、調査区南部から土坑と思われる遺構に第1～37号まで番号をつけたが、調査の過程で、同一の遺構であることや遺構でないこと（昭和期のもを含む）が判明したものについては欠番とした。また、縄文時代の陥し穴、中世の方形竪穴遺構・火葬土坑・土坑については、項を設けて前述した。その他の土坑については、出土遺物もなく、性格・時期も不明であるため、実測図及び遺物観察表で掲載する。

第11号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 褐色 ロームブロック多量

第14号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量
- 6 暗褐色 ロームブロック多量
- 7 褐色 ロームブロック多量

第15号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 褐色 ロームブロック多量

第17号土坑土層解説

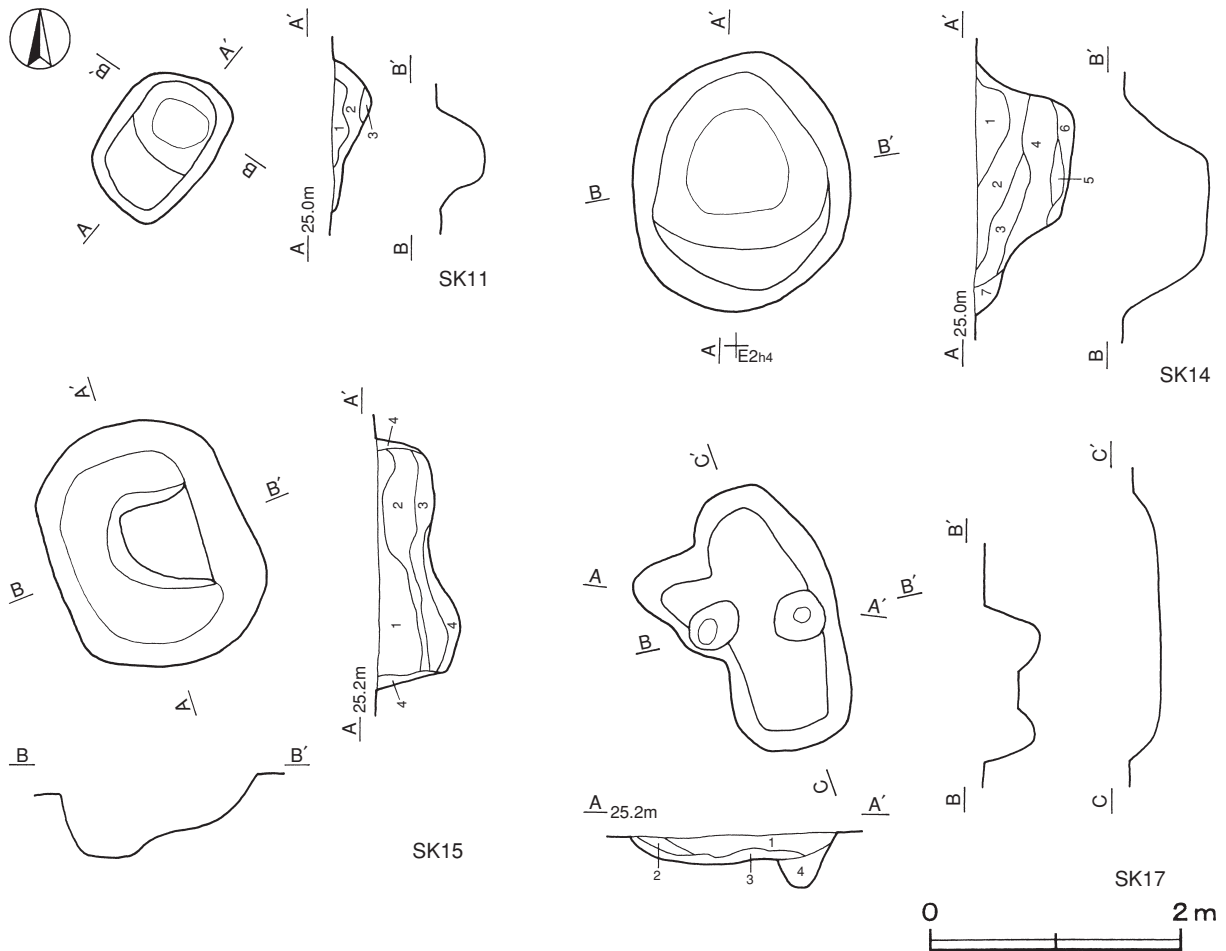
- 1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック中量
- 4 褐色 ロームブロック多量

第18号土坑土層解説

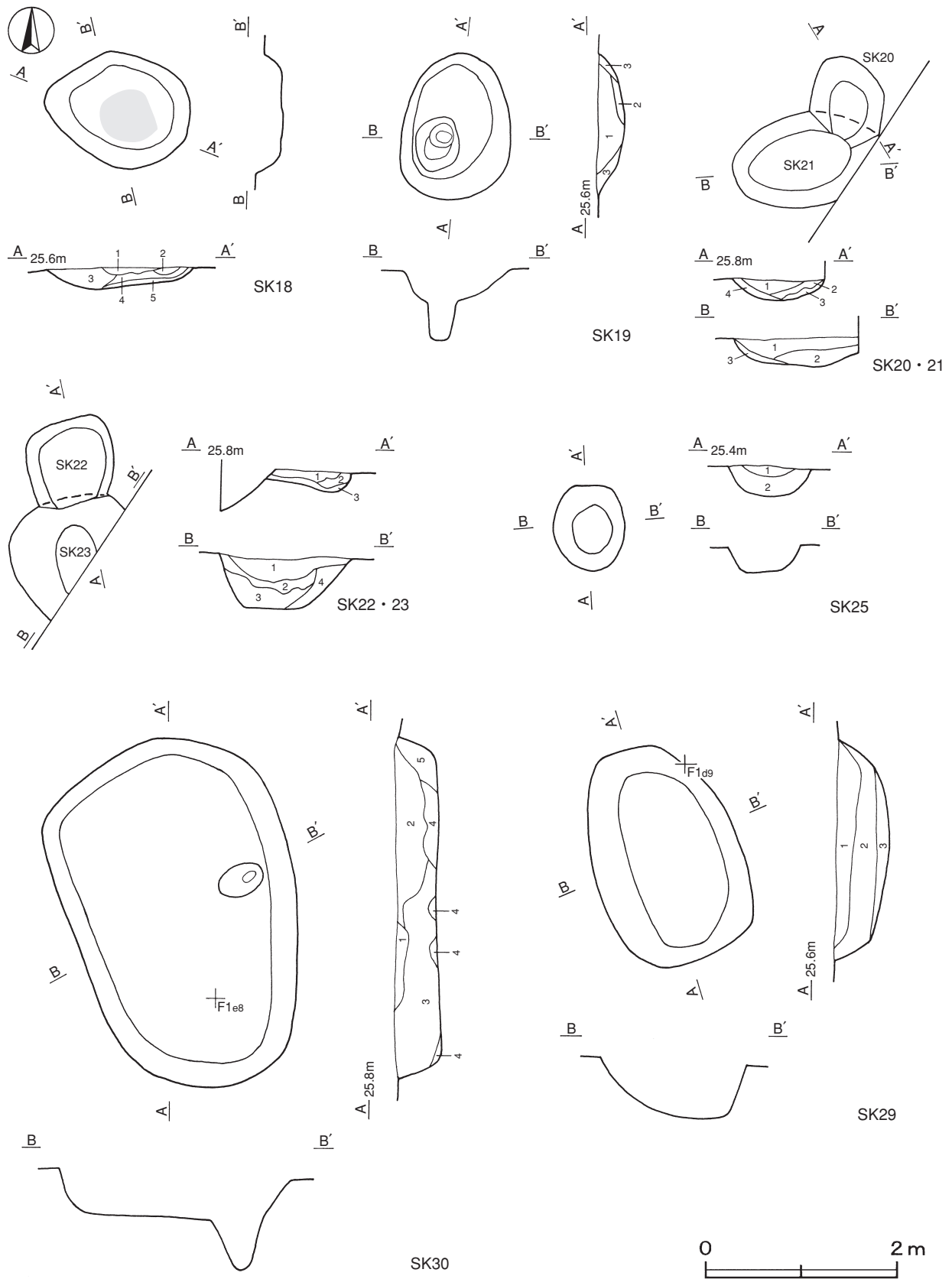
- 1 暗赤褐色 焼土ブロック多量、炭化物中量、ローム粒子少量
- 2 黒褐色 炭化物中量、ロームブロック・焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
- 5 褐色 ロームブロック多量

第19号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 褐色 ロームブロック多量



第15図 その他の土坑実測図(1)



第16図 その他の土坑実測図(2)

第20号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ロームブロック多量

第21号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 褐色 ロームブロック多量

第22号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック多量

第23号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 褐色 ロームブロック多量

第25号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量

第29号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

第30号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量

表10 その他の土坑一覧表

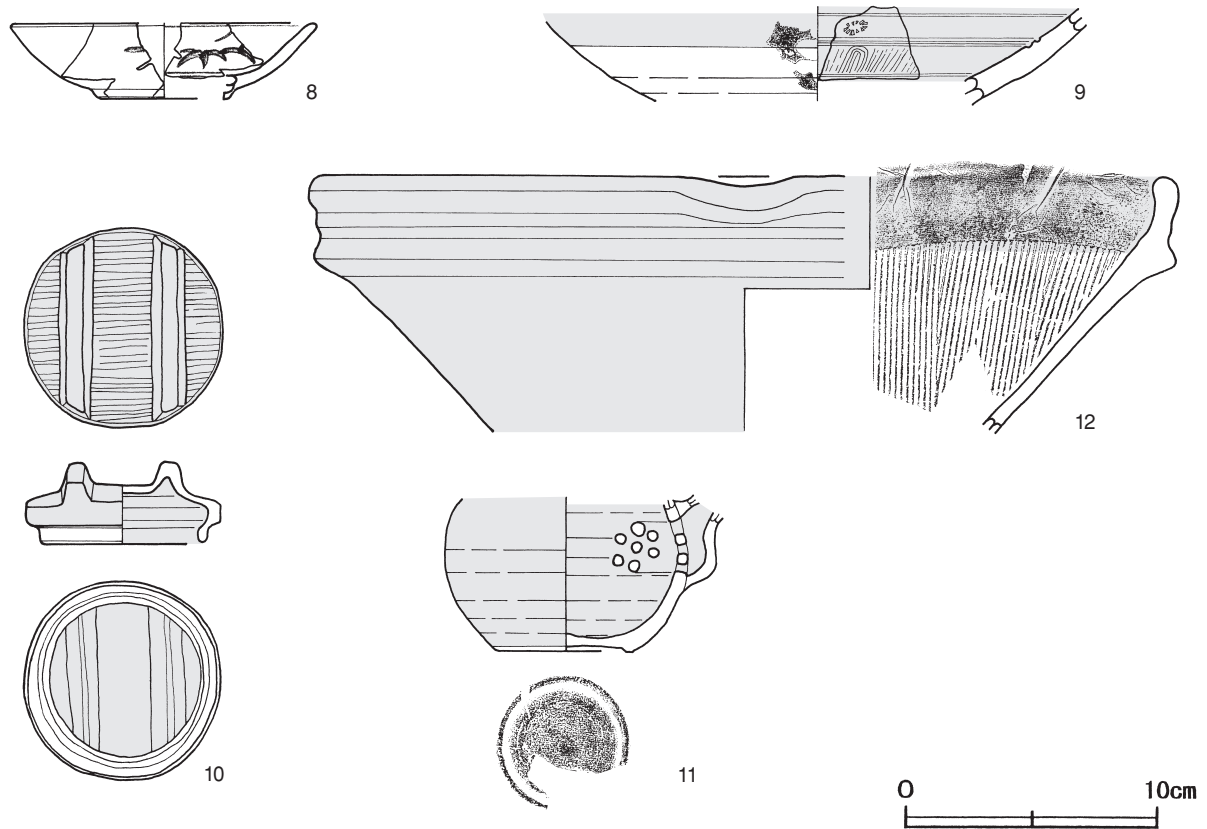
遺構番号	位置	長軸方向 長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	出土遺物	時期	備考 重複関係 (古→新)
				長軸・長径×短軸・短径(m)	深さ(cm)						
11	E 2g2	N-36°-E	隅丸長方形	1.20×0.88	38	二段	緩斜	自然			
14	E 2g4	N-6°-E	楕円形	2.04×1.70	70	二段	外傾	人為			SD2→本跡
15	E 2f7	N-16°-W	楕円形	1.98×1.60	68	二段	外傾	人為			SD2→本跡
17	F 2b3	N-22°-W	不定形	2.12×1.48	24(46)	ピット	外傾	自然			
18	F 2d1	N-70°-W	楕円形	1.54×1.16	28	平坦	緩斜	人為			
19	F 1e0	N-9°-E	楕円形	1.52×1.14	30(72)	ピット	緩斜	自然			
20	F 2f2	[N-18°-E]	[楕円形]	(0.8)×0.76	22	皿状	緩斜	自然			本跡→SK21
21	F 2f2	[N-7°-E]	[楕円形]	(1.5)×0.96	32	平坦	緩斜	人為			SK20→本跡
22	F 2e3	[N-11°-W]	[隅丸方形]	(0.9)×0.92	20	平坦	外傾	人為			本跡→SK23
23	F 2e3	[N-17°-W]	[楕円形]	(1.3)×(1.0)	58	平坦	外傾	人為			SK22→本跡
25	F 1a9	N-4°-E	楕円形	0.88×0.78	32	皿状	緩斜	自然			
29	F 1d8	N-26°-W	楕円形	2.30×1.52	62	平坦	外傾	人為			
30	F 1d7	N-14°-W	楕円形	3.64×2.30	56(104)	ピット	外傾	人為			TP1→SD3→本跡

(3) 遺構外出土遺物 (第17図)

今回の調査で、表土層から遺構に伴わない近世・近代の遺物が出土している。ここでは、陶器・磁器など特徴的な遺物について、実測図及び遺物観察表で掲載する。

その他の遺構外出土遺物観察表 (第17図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
8	磁器	皿	[12.0]	3.0	[5.0]	精良	釉透明 胎土灰白	良好	ロクロ成形 内面笹文を染付 外面染付文様不明 内・外面透 明釉を施釉 高台部接地面露胎	B 4区表土	10% PL6 18世紀後半 肥前系
9	陶器	鉢	-	(3.9)	-	緻密	釉に黄橙 胎土に黄橙	良好	ロクロ成形 内面線彫り及び印 花後白泥を象眼する三鳥手 内・外面鉄釉を施釉	E 2区表土	5% PL6 17世紀後半 唐津系
10	陶器	蓋	6.4	3.2	-	緻密	釉褐 胎土灰白	良好	木蓋模倣 内・外面灰釉を施釉 かえり部露胎	F 1区表土	100% PL6 20世紀前半 瀬戸・美濃系
11	陶器	土瓶	-	(6.1)	5.4	長石	釉暗赤褐 胎土に黄橙	良好	ロクロ成形 削り出し高台 7 孔穿孔 内・外面柿釉を施釉 底部露胎	F 1区表土	40% PL6 20世紀前半 笠間・益子系
12	陶器	播鉢	[33.6]	(10.2)	-	長石	釉暗赤褐 胎土橙	良好	ロクロ成形 片口 口縁部外帯3段 内面18条1単位の播目 口縁部内 面・外面柿釉を施釉 体部内面露胎	F 1区表土	20% PL6 20世紀前半 笠間・益子系



第17図 その他の遺構外出土遺物実測図

第4節 ま と め

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代の陥し穴1基、中世の土塁3条、堀跡2条、溝跡7条、平場遺構2か所、方形竪穴遺構2基、火葬土坑3基、土坑9基、時期不明の道路跡7条、土坑13基である。また、出土した遺物は、縄文土器（深鉢）、土師質土器（小皿・内耳鍋）、陶器（皿・天目茶碗・蓋・鉢・播鉢・土瓶）、磁器（皿）、石器（搔器・剥片・砥石）、不明鉄製品などである。ここでは、縄文時代と中世の検出遺構と出土遺物を中心に、当遺跡におけるそれらの時代の様相について述べ、まとめとする。

1 縄文時代の様相

当時代の遺構としては、陥し穴1基が確認されている。この陥し穴は、形態と出土遺物から前期前半と考えられる。その他の遺構は確認されなかったが、表土層及び遺構確認面から早期後半・前期後半・後期前半の土器や、搔器、安山岩及び黒曜石の剥片が少量ながら出土している。当遺跡のように、早・前期の陥し穴が確認された近隣の遺跡としては、下原遺跡1基¹⁾、薬師入遺跡2基²⁾、大日遺跡2基³⁾、下小池遺跡2基⁴⁾、谷ノ沢遺跡9基⁵⁾、中ノ台遺跡10基⁶⁾がある。陥し穴は、稜線などに沿って数基が直線状、あるいは曲線状に、獣道を考慮して配置されている報告例が多い。報告された陥し穴の基数は、遺跡全体の数ではなく、あくまで調査区内の数である。当遺跡も単独1基だけ配置されたものではなく、遺跡の広がりとともに、調査区域外に広く多く配置されていたものと思われる。

以上のことから、縄文時代、当遺跡の調査区内は、狩猟場として利用されていたものと思われ、周辺にキ

キャンプサイトのような小規模集落が営まれていた可能性が考えられる。

2 中世の様相

当時代の遺構としては、土塁3条、堀跡2条、溝跡7条、平場遺構2か所、方形竪穴遺構2基、火葬土坑3基、土坑9基が確認されている。調査区北部から中央部にかけて位置している土塁3条、堀跡2条及び溝跡3条でトレンチ調査では、遺物が出土していない。調査区全体でも、遺構に伴う遺物は第3号溝跡出土の不明鉄製品と第8号土坑出土の陶器皿だけであり、土師質土器の小皿・内耳鍋、陶器の天目茶碗・播鉢、凝灰岩の砥石は、すべて表土層から出土したものである。

当遺跡は、中世の土塁と堀が主体の城郭関連遺跡であり、以下、中世の様相について述べる。

土塁・堀群の全体像については、『阿見町史』(以下『町史』と略)で詳しく述べられている⁷⁾。『町史』によると、当遺跡の名称を「吉原二重堀土塁」としており、「里人は昔より吉原二重堀と呼称していた」ためとしている。具体的な土塁・堀群の記述を以下に引用する。「二重堀とはその名のごとく堀・土塁が、第1と第2に分かれ、複合組織で一体をなしている。この土塁の全長は200m、高さは3m、堀の深さは1m以上埋もれており、土塁の内・外の比高はあまり認められずおよそ1m弱である。第1の土塁より第2の土塁までの距離は50mで、この双方の大きさを比較すると、第2のものは土塁とは名ばかりで、極めて貧弱な様相を呈している。」と、記述されている。

また、大竹房雄氏は『町史』の中で、当遺跡のように二つの谷津頭を結ぶ「堀切」状の土塁と堀によって構成され、城館本体の防御だけでなく、台地上の通行を遮断するための城郭関連遺跡を「戦国土塁」と呼び、詳細な報告と考察を行っている⁸⁾。大竹氏は、これらの「戦国土塁」について、江戸崎城を居城とした土岐原(土岐)氏が、戦国時代(天文末～天正期)に構築した可能性が強いとしている。また、『茨城県遺跡地図』⁹⁾に登録されている新堀遺跡(吉原)・大堀遺跡(飯倉)・割目遺跡(大形)・雀ノ久保遺跡(大形)・内堀遺跡(追原)のほかに、東田土塁(大形)・大木戸土塁(飯倉)・堀留土塁(君島)・下宿土塁(君島)・神田土塁(吉原)・二重堀土塁(福田)の存在についても指摘している。いずれの遺跡も、江戸崎城へと通じる台地上の通称「江戸崎街道」を遮断するようなかたちで構築されており、このような遺跡は阿見町域ばかりでなく、稲敷台地上に約30か所存在するとしている。

部分的にでも発掘調査が行われたものは、当遺跡の他には割目遺跡と内堀遺跡だけである。割目遺跡は昭和53(1978)年¹⁰⁾、内堀遺跡は昭和59(1984)年¹¹⁾に、それぞれ土塁と堀跡に当たる部分のトレンチ調査が行われた。しかし、両遺跡とも当遺跡と同じように土塁の構築状況と堀跡の覆土の状況をとらえることはできなかったが、遺構に伴う遺物は出土せず、時期は中世、性格は城郭関連の防御施設ということ以外は、明確な答えを導き出すことはできなかった。

また、近年、似たような遺跡の存在が県内各所で確認されている。石崎勝三郎氏は「地名の向こうに遺構が見えた」の中で、詳細な報告と考察を行っている¹²⁾。石崎氏は、地名・地図及び航空写真から現地へ赴き、現存遺構を検証している。具体的には、「兎」・「木戸」・「新堀」・「大堀」などの地名に注目し、二つの谷津頭を結ぶ「堀切」状の土塁と堀によって構成され、城館本体の防御だけでなく、台地上の通行を遮断するための城郭関連遺跡について検討・評価を行っている。

以上のような研究を踏まえ、当遺跡をとらえてみると、以下のような特徴を挙げることができる。

- (1) 台地に入り込んだ二つの谷津頭をつなぐように、台地を掘り切っている。
- (2) 台地の縁辺や谷津そのものの地形を利用している。

- (3) 土塁と堀ばかりでなく、自然の谷津も取り込んで、高低差のある施設としている。
- (4) 土塁は、堀の掘削土を、基本的には叩き締めや突き固めをせずに、掻き上げ、盛り上げて築いている。
また、補修や拡大の痕跡は認められない。
- (5) 堀は、最初に掘り切った後、掘り直しや掘り浚えをした痕跡は認められない。
- (6) 構築状況から、一過性の施設と思われる。
- (7) 台地上に「江戸崎街道」が通っており、その台地の幅が狭まるところに構築している。
- (8) 当遺跡に隣接して、人の往来や物資の移動を規制する「木戸」施設が存在していた可能性がある。
- (9) 遺構に伴う遺物は出土しておらず、調査区全体でも出土遺物の量は極めて少ない。
- (10) 全体の出土遺物量の少なさから、大人数が長期にわたり滞在していたとは考えにくい。
- (11) 中世城館跡から離れたところに位置しており、縄張りの「総構」あるいは「外郭」とは違う様相を示している。
- (12) 防御上の優位性を高めていることから、台地上の通行を遮断し、外敵の侵入を防ぐための施設と考えられる。

当遺跡は、いつ、だれが築いた施設なのか、問題となる。時期については、これだけの構築物を築く必要性は、古代や近世にはなかったことから、中世、特に後半の戦国時代と考えられ、戦国の世の抗争激化がこのような堀切普請を行わせたと考えるのがもっとも妥当であると思われる。構築者については、これだけの堀切普請を行うためには、人々を動員できるだけの政治・経済及び軍事力が必要であり、在地領主、さらには戦国領主の存在が見てとれる。当遺跡の所在する信太庄は、戦国時代、江戸崎城を居城とし、一大勢力を築いていた土岐原（土岐）氏の領土であった¹³⁾。近隣の塙城跡・島津城跡・若栗寄居館跡・上条城跡・上長館跡・下小池城跡・福田城跡・久野城跡などは、この土岐原氏の一族、あるいは家臣のものと考えられている¹⁴⁾。土岐原氏の勢いは、天正18(1590)年の佐竹氏による常陸国統一まで続いた。

戦国時代の16世紀前半（永正～天文期）、当地域及びその周辺は、土岐原氏・岡見氏・小田氏を頂点とする複雑な動きがあった。後半（永禄～天正期）、北からは佐竹氏・多賀谷氏の進出、南からは北条氏（後北条氏）の進出が顕著となり、土岐氏をはじめ岡見・小田両氏も小田原の北条方となった¹⁵⁾。こうした背景の中で、当遺跡をはじめとする30もの類似遺跡が築かれていったものと考えられる。これによって、本拠の江戸崎城ばかりでなく、支城・出城も含めて、領国全体の城砦化が進んでいった。

佐竹氏による統一後、慶長5（1600）年、常陸国内に再度緊張が走る。会津の上杉討伐に始まるいわゆる「北の関ヶ原」で、これについては藤井尚夫氏の著書が詳しい¹⁶⁾。藤井氏は、対徳川の上杉・佐竹戦線は、合わせると約180kmにもなり、その線上には各種の戦場遺跡が残されているとし、直接徳川領と境を接する佐竹氏の動向にも注目している。また、上杉領内に、当遺跡と似たような直線的な土塁と堀によって構成される堀切・塁壁などの防御施設が存在することを確認し、「関ヶ原」の時点で対徳川のために、奥州街道を遮断する目的で築いたものとしている。上杉氏と同盟を結んでいた佐竹氏も、同時点对徳川のために、街道筋を遮断する目的で同様の施設を築いたと考えられ、当遺跡もその中の一つであった可能性が高い。

当遺跡から出土した中世の遺物を観てみると、瀬戸・美濃系陶器の皿・天目茶碗・播鉢は、いずれも小破片であるため時期を明確にすることが難しいが、大窯期の中でもIV期が最も妥当ではないかと考えられ、16世紀第4四半期の実年代が与えられる¹⁷⁾。土師質土器の小皿・内耳鍋も少破片であるが、16世紀後半でも新しいほうと思われる¹⁸⁾。これらの出土遺物から得られた年代観は、当遺跡の検出遺構及び他の類似遺跡から得られる年代観、さらには当該期の歴史的背景とも合致するものである。



第18図 阿見町周辺土塁・城館分布図（文献7より加筆転載）

その他、台地上の第1～4号溝跡も、土塁・堀群と同時期の溝跡と思われる。これらは合わせて一体となる区画溝で、土橋を挟んでL字形になる二つの区画が調査区内で確認できた。しかし、溝跡は4条とも調査区域外に延びるため、区画の全体像や区画内の様相はとらえることができなかった。

これらの土塁・堀群と平場遺構群、及びL字形の区画溝群は、廃絶後も土地利用の上で大きな制約となり、現在に至る地割の原形となっている。

註

- 1) 小川和博・大湖敦志『下原遺跡』阿見町教育委員会 1998年3月
- 2) 駒澤悦郎「薬師入遺跡 阿見吉原土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第239集 2005年3月
- 3) 綿引英樹・後藤孝行「谷ノ沢遺跡・手接遺跡・花房遺跡・大日遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第212集 2004年3月
- 4) 小竹茂美・鴨志田祐一・浦和敏郎「下小池遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第210集 2004年3月
- 5) 前掲註3)に同じ。

- 6) 矢ノ倉正男・寺門千勝「星合遺跡・中ノ台遺跡 阿見東部工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第137集 1997年9月
- 7) 大竹房雄「戦国土塁」『阿見町史』阿見町 1983年3月
- 8) 前掲註7) に同じ。
- 9) 茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2001年3月
- 10) 河野辰男・山中正夫・大竹房雄・西宮一男『割目遺跡発掘調査報告書』阿見町教育委員会 1979年3月
- 11) 高木國男・小泉美明・松本浩古『内堀遺跡（土塁）発掘調査報告書』阿見町教育委員会 1985年3月
- 12) 石崎勝三郎「地名の向こうに遺構が見えた」『茨城県考古学協会誌』第19号 2007年5月
- 13) 天文11(1542)年、土岐宗家の頼芸は斎藤道三によって領国である美濃を逐われたため、翌年弟の江戸崎城主土岐原治頼に家牒を譲った。それ以降、江戸崎土岐原氏は旧姓に復し、土岐氏を名乗ることになった。
- 14) 大竹房雄「城館跡」『阿見町史』阿見町 1983年3月
- 15) 雨谷昭「戦国の争乱と阿見」『阿見町史』阿見町 1983年3月
- 16) 藤井尚夫『フィールドワーク 関ヶ原合戦』朝日新聞社 2000年9月
- 17) 藤沢良祐「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10号 2002年3月
- 18) 桃崎祐輔「常総地域の中世陶磁器と土器－中世びとのくらしとつわ－」『焼き物にみる中世の世界－県内出土の土器・陶磁器を中心にして－』上高津ふるさと歴史の広場 1999年3月

写真図版



二重堀遺跡周辺航空写真（米軍昭和22年撮影）

調査区北部
土塁・堀跡群
確認状況



調査区北部
土塁・堀跡群
確認状況



調査区北部
土塁・堀跡群
調査終了状況



PL 2



調査区南部
調査終了状況



調査区南部
調査終了状況



調査区南部
調査終了状況



第1号陥し穴完掘状況



第1・2号土壘，第1号堀跡調査終了状況



第1・2号土壘，第1号堀跡調査終了状況



第3号土壘，第2号堀跡調査終了状況



Aトレンチ第1号土壘土層断面



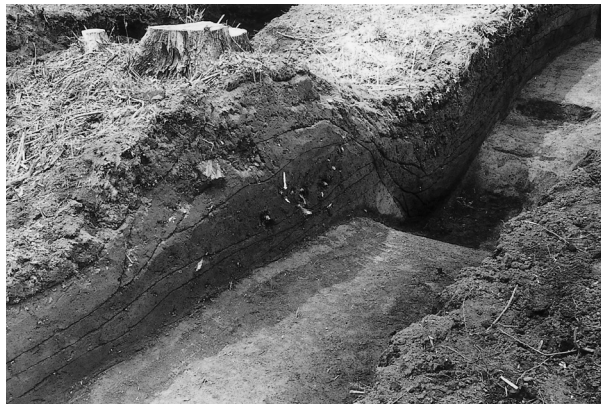
Aトレンチ第1号堀跡土層断面



Aトレンチ第2号土壘土層断面



Aトレンチ土層断面



Dトレンチ第3号土塁土層断面



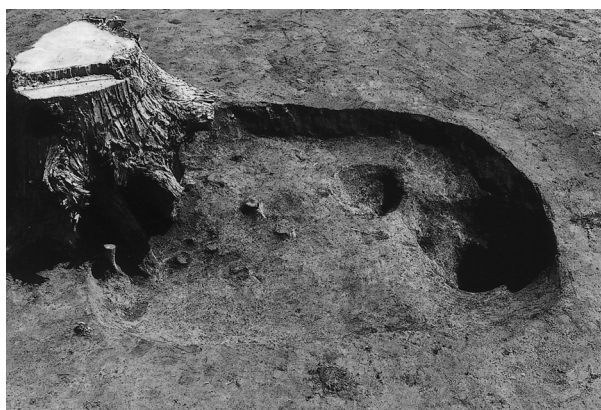
Dトレンチ第2号堀跡土層断面



Dトレンチ第1号平場遺構土層断面



第1号方形竖穴遺構完掘状況



第2号方形竖穴遺構完掘状況



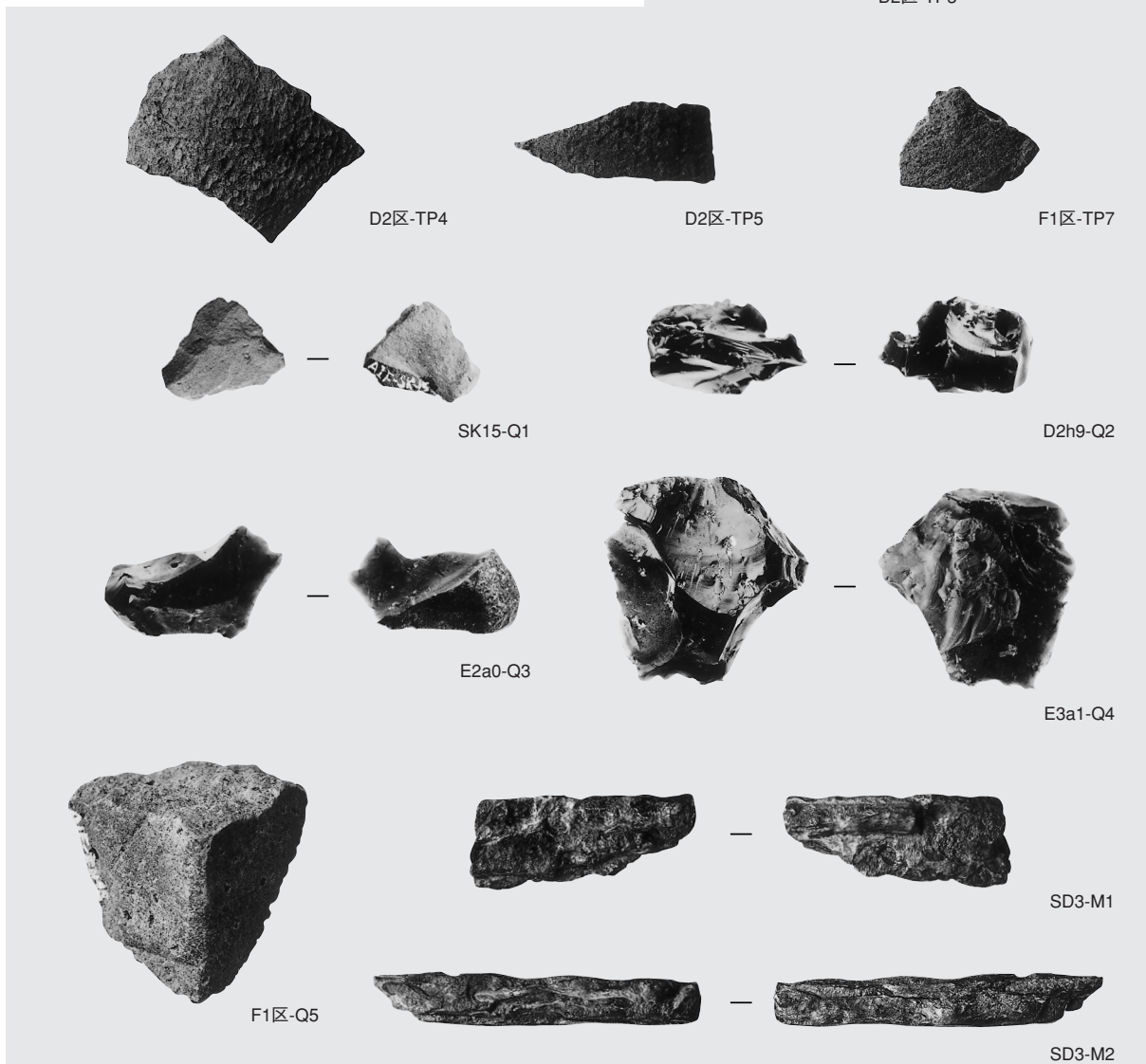
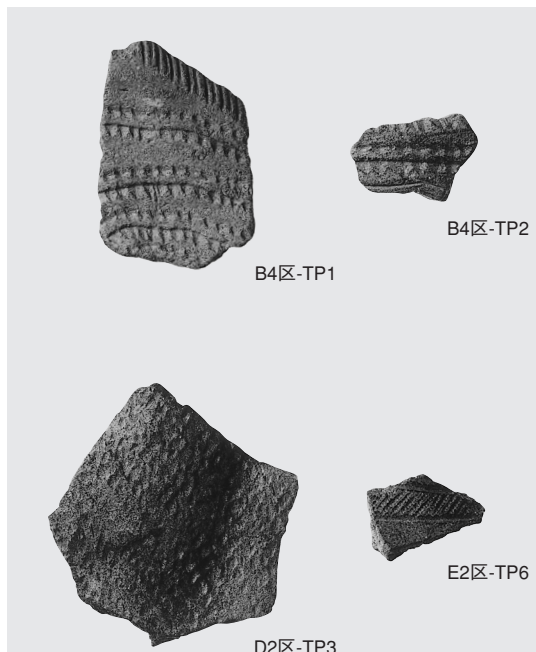
第1号火葬土坑完掘状況



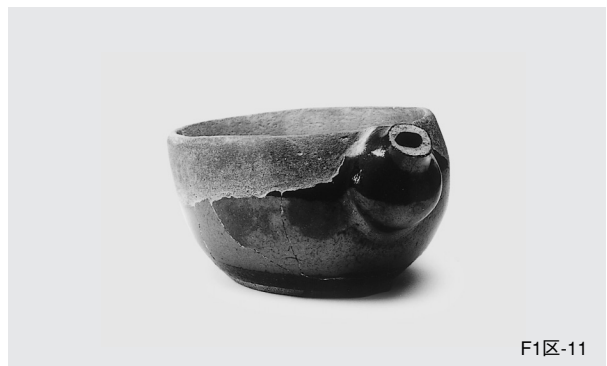
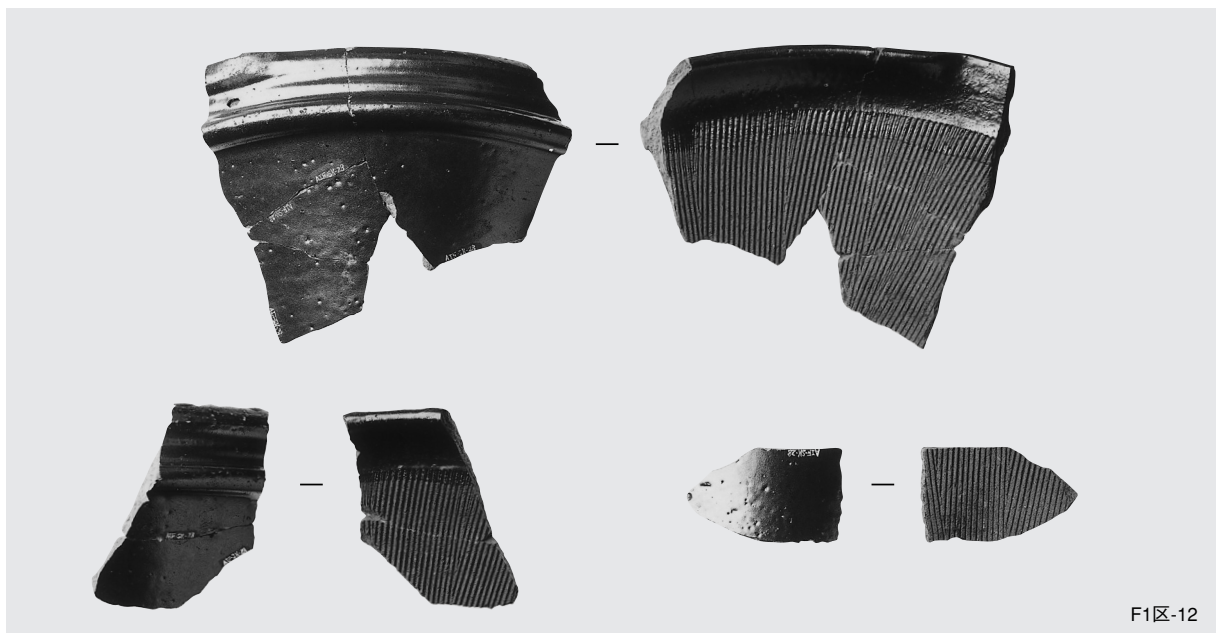
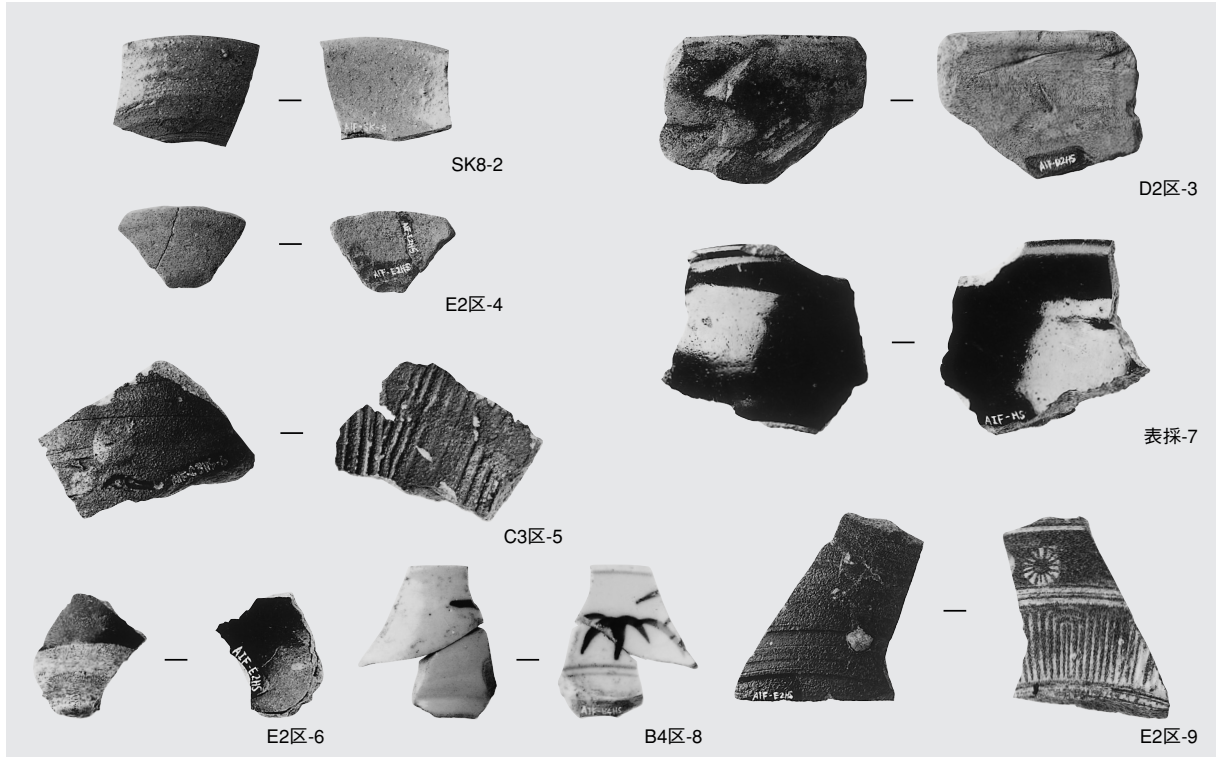
第2号火葬土坑完掘状況



第3号火葬土坑完掘状況



第1号陥し穴, B4区・D2区・E2区・F1区表土, 第15号土坑, D2h9・E2a0・E3a1遺構確認面, SD3出土遺物



第8号土坑，B4区·C3区·D2区·E2区·F1区表土，表探出土遗物

茨城県教育財団文化財調査報告第297集

二重堀遺跡

主要地方道竜ヶ崎阿見線バイパス
整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書

平成20(2008)年3月19日 印刷
平成20(2008)年3月24日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 株式会社 高野高速印刷
〒310-0853 茨城県水戸市平須町1822-122
TEL 029-305-5588